

特集

3 **子どもが伸びる
学習評価**

4

総論

**評価を通じて一人ひとりの
良さに着目し、自己変革を促す**

国士館大体育学部こどもスポーツ教育学科 **北 俊夫**教授
東京都足立区立本木小学校 **平山仁美**校長



10

学校事例1

学びの軌跡を残す評価で子どもの成長の実感を高める

香川県香川大教育学部附属高松小学校

14

学校事例2

子どもを評価に参画させて自己評価力や自尊感情を育む

奈良県御所市立葛小学校

18

学校事例3

单元ごとに児童の評価を蓄積し丁寧な支援に生かす

茨城県高萩市立東小学校

22

展望

**多面的な評価方法によって
「自分と向き合える力」を付ける**

京都市大学院教育学研究科准教授 **西岡加名恵**



連載

1

私を育てたあの時代、あの出会い

より良い授業を追究する恩師の姿に教師としての存在意義を学んだ

福島県福島市立福島第四小学校 校長 **丹野 学**

26

パワーアップ! 授業研究

外国語活動の授業を改善する工夫

長野県佐久市立臼田小学校

28

つながる学校と家庭の学び

「ファミリー読書」活動で家庭で本を読む機会を広げる

岩手県滝沢村立滝沢東小学校

32

読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて
取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い

第9回

より良い授業を追究する恩師の姿に 教師としての存在意義を学んだ

福島県 福島市立福島第四小学校校長 **丹野学** TANNO MANABU

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、丹野校長が語る。

「学びの出発点は子ども」 大切な前提を学ぶ

人は誰でも磨けば光る部分を持っている。子ども一人ひとりの良いところを見付けて伸ばし、自信を持たせたい。教師を志したのはこのような思いからです。

その信念を体現するため、新任の頃から、休み時間も放課後も出来るだけ子どもと一緒に過ごし、一人ひとりを理解しようと心掛けていました。授業も工夫しました。「先生の授業はよく分かる」と評判は上々で、子どもたちの成績も良く、教師とし

ての自分に自信を持っていました。

しかし、そんな私の自信は、福島市立野田小学校で、1つ上の学年を担当していた佐藤吉郎先生との出会いによって打ち砕かれました。教師になって6年目のことです。

当時の私は、強力なリーダーシップで学級経営を行い、子どもに強く指示することもよくありました。ところが、佐藤先生はほとんど指示をしていないように見えませんでした。合同で行っていた特別活動では、子ども主体で全てが進み、子どもの表情は生き生きしていました。「こんな子どもの顔も、教師のかか



たんの・まなぶ 専門教科は算数。福島県公立小学校、福島大教育学部附属小学校、福島県小学校長会事務局次長などを経て、2010年度から現職。2011年度からは福島県小学校長会会長も務める。

1976 (昭和51)

新採として
相馬市立飯豊小学校に
赴任



飯豊小学校に
新採として赴任した
当時の授業風景

1986 (昭和61)

福島大教育学部
附属小学校に赴任

1992 (平成4)

伊達郡保原町立
大田小学校に
教頭として赴任

1995 (平成7)

福島県教育庁総務課
管理主事に着任

1999 (平成11)

伊達郡飯野町立
青木小学校に
校長として赴任

2006 (平成18)

福島県立
双葉翔陽高校に
校長として赴任

2010 (平成22)

福島市立
福島第四小学校に
赴任

「授業は難しい。だからこそ 謙虚に学び続けることが大事」



わり方も見たことがない」と衝撃を受けました。こうした表情を授業で引き出せない自分が情けなく、また悔しくもありました。

今でもよく覚えているのは、運動会の準備をしていた時のことです。子どもたちが運動会を盛り上げようと、トイレットペーパーに応援メッセージを書き、屋上から垂らしていました。他の先生たちは「紙を無駄にして」と渋い顔でしたが、佐藤先生はその場では注意をしませんでし

た。そして、子どもたちの気持ちを認めた上で、最後に「これ、どうするんだ？」と一言問い掛け、考えさせたのです。子どもたちはトイレットペーパーを巻き直し、トイレに戻しに行きました。

「細かく指示をして目標が達成できても、それは子どもの力にはならない。今の指導では駄目だ。変わらなければ」と感じました。学びの出发点は子どもの中にある——教育方法論以前の前提として大切なことを

佐藤先生に教えていただきました。
子どもに自信を持たせてあげられるのは「授業」

その後、赴任した福島大教育学部附属小学校で出会った笹川直樹先生も、「授業をつくるのは子ども」という信念を体現されている方でした。笹川先生の授業では「先生、駄目だよ。自分たちでやるよ。これはこうするといんだよ」と、子どもが授業を引っ張っていたのです。笹川先生は授業中、徹底して「駄目教師」を演じ、一方で子どもの学ぶ意欲を見事に引き出していました。こうした授業を成立させるためには、綿密な事前準備や教材開発に加え、子ども一人ひとり、そしてクラスの人間関係もしっかり理解しておく必要があります。「すごい先生だな」と感銘を受けました。

笹川先生とはよく一緒に出掛けて「このバスの料金表を授業の導入に使えないか」など、子どもを学ぶに向かわせる材料を見付けては、議論を交わしました。「教師は授業が勝負。子どもに本当に自信を持たせてあげられるのは授業だ。だからこそ、授業中はもちろん、普段から本

気で子どもにかわり、理解しようとするのが大切」という思いを更に強くしました。

しかし、授業は本当に難しいものです。振り返ってみても、全ての子どもの学びが保証される100%の授業が出来たことなど一度もありません。だからこそ、更に子どもに寄り添い、理解しようとする。授業課題を解決しようと、自分に挑戦し続ける。この謙虚に学び続けるという姿勢に、教師の存在意義があるのではないのでしょうか。校長となり、私の役目は子どもに直接かわることではなくなりました。今度は、子どもに寄り添う先生方を支え、守っていきたくて考えています。

福島県は東日本大震災以来、いまだに多くの問題を抱えています。学力の低下も懸念されます。しかし、厳しい時だからこそ、先生方には授業を大切にしてほしいと思います。復興の担い手である子どもたちの学び心に火を灯し続け、確かな学力、生きる力を身に付けてあげることが教師の役目。学校は復興の最大の拠点です。こうした自負を持った教師集団をつくれるよう、現場の先生方に語り掛けていきたくと思います。

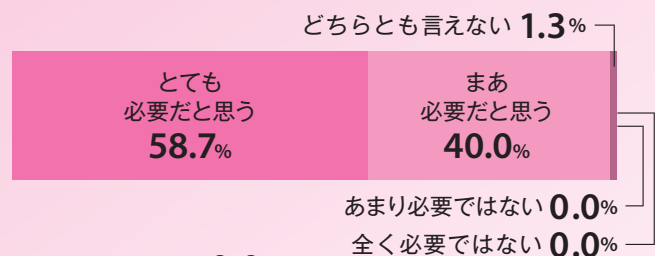
特集

子どもが伸びる 学習評価

学習評価は必要だと感じながらも、
学校現場では十分な取り組みが出来ていないのが現状のようだ。
識者や校長の考え、学校事例を基に「子どもが伸びる」という点から
学習評価を捉え直してみたい。

学習評価は必要だが、十分に出来ていない

Q1.
「学習評価」は
必要だと思いますか



Q2.
「学習評価」は
出来ていると思いますか



*全国の「VIEW21」小学版読者モニター（小学校教師）にアンケート用紙を郵送し、ファクスで回収。
調査期間は2012年3月、有効回答数はQ1は75人、Q2は72人

評価を通じて一人ひとりの良さに着目し、自己変革を促す

学習評価の規準や方法は、必ずしも学校全体で共通理解されていないのが現状だ。

新課程では、思考力・判断力・表現力の育成が重視され、それらの力を適切に評価することも求められている。新課程における学習評価のあり方について、
 国士舘大の北俊夫教授と東京都足立区立本木小学校の平山仁美校長に聞いた。

■学習評価の役割

成績を付けるよりも

「学力」を付けるためのもの

——学習評価の役割について、まず先生方の考えをお聞かせください。

北 「学習評価」と聞いて、多くの人が思い浮かべるのは、通知表やテストだと思えます。つまり、成績を付けて記録し、本人や保護者、上級学校に伝えることが、学習評価の役割だと考えている人が多いということです。

確かに、成績を付けることは学習評価の重要な側面ではありますが、本来の役割は別にあると考えます。それは子どもの学力を伸ばすことです。学習評価は、「成績を付ける」

ことよりも、「学力を付ける」ことを優先して行われるべきではないでしょうか。

平山 おっしゃる通り、学習評価の主たる役割は、一定の尺度を設けて付ける「評定」とは異なると思えます。学習評価は、子ども一人ひとりの良さや可能性に着目し、その一層の開花を促すものです。教師は評価を機に、子どもを更に伸ばしたり変容させたりする方策を考えます。それをせずに一方的に教えるだけでは、教師としての役割を十分に果たしていないと思います。

北 2010年3月に中央教育審議会が出した「児童生徒の学習評価の在り方について」の報告には、学習評価の役割に関する重要な指摘があります(図1)。ここでは、学習指

図1 学習評価の役割について

3. 学習評価の今後の方向性について

(1) 学習評価の意義と学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性

…学習指導要領は、各学校において編成される教育課程の基準として、すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり、指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するものであるのに対し、学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものと言える。

導要領は「指導」の面から、学習評価は「結果」の面から、教育水準の維持向上を保障するものであると述べています。つまり、学習評価は、「評定を付けて終わり」というのではなく、もし「不十分」と評価された子どもがいれば、学力を付けるために再び指導することに生かされるものです。

「指導と評価の一体化」とよくいわれますが、教育水準の維持向上のためには「目標と指導と評価の一体化」が大事だと考えます。明確な目標に沿って指導と評価を行うからこそ、つまり目指している子どもを指導できます。目標と指導と評価は三角形の頂点に位置付けられるのです。

平山 学校では、目標に準拠して観点別の評

出典／文部科学省中央教育審議会 初等中等教育分科会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」(2010年3月)より抜粋

子どもが伸びる学習評価

北俊夫 教授
 国士舘大体育学部こどもスポーツ教育学科

きた・としお◎東京都公立小学校教諭、東京都教育委員会指導
 主事、文部省（現文部科学省）初等中等教育局教科調査官、岐
 阜大教授を経て現職。専門は社会科教育、教育課程論。著書に
 『子どもの学力をつける学習評価』（文溪堂）、『新社会科／全学
 年・単元の評価規準一覧』（明治図書出版）など。



平山仁美 校長
 東京都足立区立本木小学校

ひらやま・ひとみ◎東京都の公立小学校教諭、足立区立花畑西
 小学校長などを経て、現職。
 足立区立本木小学校◎2012年4月、本木小学校と本木東小
 学校が統合してできる。「子どものよさを大切に、どの子
 も伸ばす本木の教育」を目指す。児童数は450人。

評価規準（判断する際のものさし）を作成して
 評価を行います。目標に達していない子ども
 には、支援をする必要があります。もし、多
 くの子どもが目標に達しない状況にあるなら
 ば、教師の指導に問題があると考えられます。
 つまり、目標に準じた学習評価は、子どもの
 学習状況を把握すると共に、教師が自分の授
 業を振り返る指標となるわけです。

学習評価のもう1つの意味は、子ども一人
 ひとりの良さや可能性を見いだすことにあり
 ます。教師は、子どもの発想や着眼点などを
 肯定的に受け止めて、個性を発見し、その伸
 長を促すような評価を心掛けなければなりま
 せん。

北 平山先生がお話しされた通り、学習評価
 には「教師」と「子ども」の2つの軸があり
 ます。教師が設定した目標や評価規準に達し
 たかどうかを見る評価と、その子どもが以前
 に比べて成長した部分を見る評価や、相対的
 に得意なことを見いだして行う評価です。後
 者の子どもを軸にした評価を「個人内評価」
 といい、目標に達していなくても、以前より
 も進歩の状況が見られれば褒めることが出来
 ます。

平山 学習評価の基本は、褒めて伸ばすこと
 にあると思います。褒めることで次への意欲
 が出てきますし、自分からやってみようとい
 う積極性も生まれるでしょう。「面白いこと
 に気付いたね」「いい意見だね」など、まず

は子どもの考えを認めることが大事だと考え
 ます。

北 「成長したね」と言われれば誰でもうれ
 しいですし、自分が頑張ったことに自信を持
 てます。褒めた上で、どこを頑張ればもっと
 良くなるか、更なる課題を伝えようと、やる気
 が出てきます。

学習評価における課題

経験豊富な先生から 継承したい指導と評価

——学習評価について、どのような課題があ
 るのでしょうか。

北 学習評価は、子どもに学力を付け、伸ば
 すために行うものです。しかし、教師によっ
 て意識にばらつきがあるのが現状のようです
 （P.6図2）。先生方は、評価を評定として捉
 える傾向が強く、保護者に評価の結果を伝達
 するために行うという、学習評価が目的化し
 ていることは否めません。また、子どもの成
 績が悪いと、教師は指導上の責任が自分にあ
 ると考えてしまう面もあります。そのため、
 学習評価の研究に熱心になれないのだろうと
 思います。

国立教育政策研究所が示している評価規準
 や評価方法は、教科ごとの専門家が作成して
 おり、大変よく出来ています。しかし、全教
 科を教える小学校の先生には、それらを全て

図2 学習評価についての課題

- 数値化が難しい、点数では測りきれない
- 評価規準に客観性を持たせることが難しい。教師の主観になってしまう面がある
- 教師の力量の問題、教師によるばらつきがある
- 教師自身の意識改革と一層の力量向上がなかなか進まない
- 上記のような評価の課題を克服するだけの時間がない

*「VIEW21」小学版読者モニターアンケート（2012年3月実施）

新課程になり、思考力・判断力・表現力

■ 思考力・判断力・表現力を高める学習評価
**思考力を育む指導を工夫することで
 自ずと学習評価も出来る**

使いこなせないことも、学習評価が難しいと捉えられている一因なのかもしれません。更に、指導や評価の技法がベテラン教師から若手教師に継承されにくくなっていることも、学習評価の課題に挙げることが出来ます。

平山 若手教師には、出来るだけ教職経験の豊富な教師の授業を見に行くように指導しています。ベテラン教師がほとんど退職し、年齢層のバランスが崩れつつあるため、問題意識を持って取り組むべき課題だと考えます。

などが当初より育てているという調査結果もあります（図3）。それらの力を伸ばすためには、どのような学習評価が適切だとお考えですか。

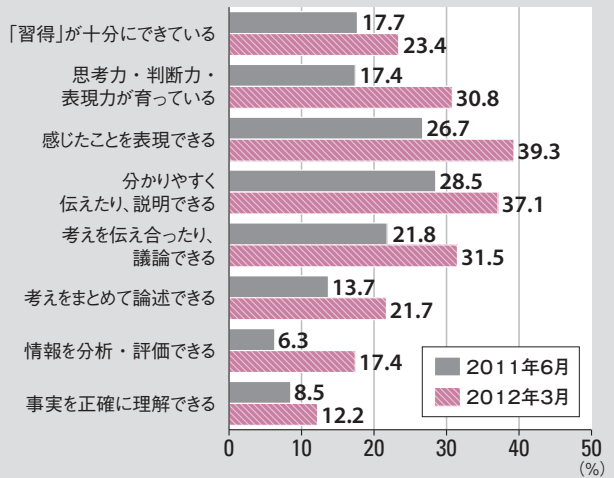
平山 今の子どもは、「なかなか自分の考えを持ってない」「判断や表現が苦手」といわれます。しかし、それは、子どもが自ら考える、判断するような場面を、授業にあまり設けていなかったことの裏返しではないかと思えます。例えば、授業で子ども同士が考えを「伝え合う」場面はあっても、友だちと考えを深めたり、新たな考えを生み出したりといった変容に至るような「話し合い」になっていないケースはよく見られます。

北 日本の教師は、「教え上手」といわれています。知識や技能を教えるのは得意ですが、「育てる」ことはあまり得意ではないようです。思考力・判断力・表現力は教える身に付くものではありません。教育の「育」の部分であり、「関心・意欲・態度」と同じように、育てて身に付いていくものです。その育て方についてはまだ十分な実践がなく、指導方法が定着していないのが現状です。

平山 思考力などを育てるには、「考えなさ

図3 子どもの能力について感じる変化

◎新学習指導要領の実施によって、児童はどのように変わってきていると思いますか



注1) それぞれの児童が「増えた」の%
 出典/Benesse 教育研究開発センター「新教育課程2011年度末調査」

新課程の実施以降、教師は子どもの思考力・判断力・表現力などの力が徐々に育ってきていると実感している

い」と言っただけで子どもに任せるのではなく、教師がしっかりと取りをする必要がありま

す。板書で子どもの考えを整理しながら話し合わせたり、あるテーマについて「あなたは どう思いますか」と発問したり、教師が導いて子どもの思考を引き出すことが大切です。

北 思考力・判断力・表現力を評価するのは難しいとよくいわれますが、それらの能力を育む指導が出来ていけば、自ずと評価できると思います。指導と評価は一体のものだからです。どのように思考力を育てるかを考えた授業では、あらかじめ子どもの思考の流れを想定しているため、子どもの思考の状況を見取ることが出来ます。

子どもが伸びる学習評価

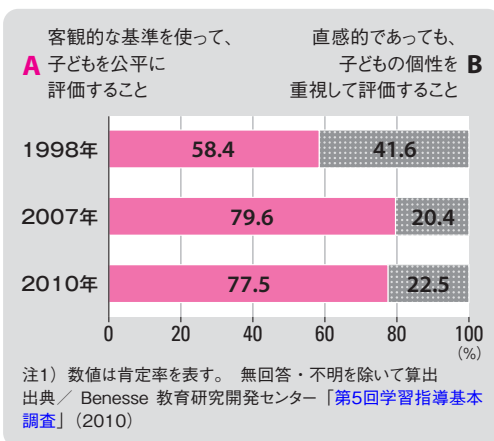
平山 子どもがどのような考えや判断をしたのかを把握するには、根拠を明確にすることが何より重要だと思います。そのためには、子どもが考えたことを表出させる必要があります。具体的には、ノートに自分の考えやその理由を書かせる、話し合いなどの交流場面を設けて考えの変容とその根拠を明確にさせるといった学習活動を通して、子どもの思考や判断の様子を把握できます。

北 子どもに根拠を考えさせることが大切です。例えば、工場見学に行った後、必ず感想を聞くと思います。「大変だと思いました」「やりがいがありました」と思ったことを答えさせて終わってはいないでしょうか。「どうして、そう思ったのか」と問い返せば、概念を具体化させる「演繹的」な思考を促せます。更に、いろいろな考えが出てきた時には、「まとめてごらん」と問い掛け、整理させることで「帰納的」な思考力が育ちます。子どもの発言に対して教師はどのように応えるかによって、思考力の育ちは大きく変わります。若手の先生は、経験豊かな先生と子どもとの発言のやりとりをよく聞き、そうした力を磨いてほしいと思います。

児童理解を研鑽し 評価の妥当性や信頼性を高める

——目に見えない力を測る上では、評価の客観化が難しいという声も聞かれます(図4)。

図4 教師の評価に関する意識の変化



教師の客観的な基準を使った評価への意識は高まっている

平山 数値化できる力は一部に過ぎず、教師が子どもの内面を丁寧に見取ることが重要です。人が人を見るわけですから、100%客観的というのは無理がありますが、経験を積んだ教師の目は節穴ではありません。一人ひとりの子どもの良さや可能性をきちんと見抜いて評価できると思います。

北 そもそも、教師によって子どもに対する見方に多少の違いがあることは、むしろ自然なことではないかと考えています。教師による見方の違いは、多様な評価につながります。子どもを複眼的に見取る「トンボの目」は大切で、教師それぞれに見方の持ち味があっても良いと思います。

平山 確かに、担任が変わることによって評価が変わり、自信を持つ子どももいます。1人の教師が子どもに与えられる刺激には限界

があり、違う教師が違う刺激を与えて、子どもの新たな良さを引き出していくことも大切ですよ。

北 「きちんと評価されている」という信頼関係が、教師と子ども・保護者との間に築けていけば、ある程度の主観が入っても問題ないのではないかと思います。客観性のみを重視すると、評価方法が固定化し、学力の総体を捉えにくくなる恐れもあります、目に見えない部分や内面を捉えるなど、児童理解の研鑽を重ね、評価の妥当性や信頼性を高める工夫をすることが大切です。

実践のヒント

自己評価や相互評価で 子どもの自己変革を促す

——学習評価をより効果的に行うには、どのような工夫があるでしょうか。

平山 前任校では「評価・支援シート」の活用を試みました。授業のねらいに最も直結する場面で使用します。児童の座席表があり、欄外には評価規準および想定される支援などを書いておきます。机間指導の際に有効です。教師が予測できていないつまりきもあるため、用意した支援策では十分に補えないこともあります、あらかじめ考えておくのとそうでないのでは大違いです。

北 どの場面で評価するかというタイミング



も重要です。例えば、記録に残すための終末のまとめの場面だけにします。それを授業後に確認するようにして、授業中は指導に専念します。

授業では、全員に十分な学力を付けさせることを念頭に置き、出来ていない子どもをなくすことを最優先に考えていただきたいと思っています。

平山 もちろん、まずは指導第一です。そし

て、その指導内容を子どもがきちんと理解しているのか、一人ひとりの学習状況を見取るとともに、「せかささない、待たせない」ということを心掛けています。出来ない子どもにはせかさずに根気強く指導する一方で、出来た子どもにはチャレンジ問題を用意するなどして、一層定着させたり、新たな意欲を引き出したりします。

北 出来た子どもに、つまづいている子どもを教えさせるのも1つの方法だと思えます。教えることを通して、更に理解が定着したり深まったりするからです。

平山 子どもの自己変革のきっかけとして、自己評価も大切にしています。今日のめあてに対して、自分の取り組みがどうであったのかを自分自身で評価させることも有効です。その時間の成果や課題を自分なりに明らかに出来るからです。

北 自分の学習を振り返ることで、学習への充実感や満足感を味わうことが出来るところに、自己評価の良さがあります。

平山 高学年では相互評価も行くとよいでしょう。友だちから褒めたり認められたりする事は、子どもにとって、教師や保護者からの評価とは異なる、格別な喜びがあります。子どもたちが共に認め合う関係が生まれ、人間関係がうまくいくことにもつながります。互いの良い点に着目させることがポイントだと思います。

時間を有効に使い 重要な場面を丁寧に見取る

平山 教師は多忙ですから、学習評価についてじっくり研究をし、手間を掛けて評価をするというのは、現実的にはなかなか難しいものがあります。本校では、評価の簡素化も考えています。例えば、先程お話しした「評価・支援シート」は、現任教でも活用しています。が、全ての授業で使用するのではなく、単元の第3時と第6時というように、有効な場面を選択して活用します。他の時間は、時間内のポイントとなる箇所での児童のノートや発言の板書記録などを基に確認する方法を取っています。

北 毎時間、全ての子どもをABCで評価をするのは、無理なことではないでしょうか。その時間の目標に照らして、「出来た、出来なかった」を判断するくらいでよいかと思えます。その記録を基に、単元ごとにABCで評価すれば十分だと思います。

平山 あまりにも評価に追われると、評価のための評価となってしまう恐れがあります。ただし、テストだけで評価をしていては、子どもの良さや可能性、授業の問題点などを見逃してしまいかねません。子どもに考えをノートに書かせておいて授業後に確認するなど、時間を上手に使うと、子ども一人ひとりの考えやその背景を評価することを心掛けた

子どもが伸びる学習評価

いと思います。

評価の目的を繰り返し発信し 保護者との信頼関係を築く

——保護者が通知表をどのように捉えて、子どもと接するのも重要なと思います。保護者と学校との関係づくりについてアドバイスをいただけますか。

平山 通知表の所見欄には、子どもの成長した面を中心に記載し、子どもの課題は、学校が今後どのような指導をするのかという角度から書くようにしています。毎年、保護者から通知表の見方をプリントで伝え、子どもの良さや成長を理解するために、評定だけでなく所見欄にも注目していただいています。

北 保護者は、学期末に通知表でいきなり評価の結果だけを知らされると不安を感じます。年度や学期の始めに白紙の通知表をコピーして配り、学習の目標や評価の観点を事前に説明しておくとういでしょう。その際に、評価は、テストだけでなく、さまざまな方法で行われることも伝えておくとういでしょう。

平山 保護者からは、テストでは高得点なのにどうして評価が良くないのかと説明を求められることもあります。いろいろな面から子どもの力を評価していると説明することは、確かに大切です。

北 最終的には、「この先生が評価しているのだから間違いない」という信頼関係が出来る

ていることが重要です。

平山 教師によっては、ついつい評価を甘く付けてしまう傾向があるようです。しかし、子どもの力を伸ばすためにも、自信を持って評価しなければなりません。それは、自分が教師として、その子の成長を更に支援していくという意思表示でもあります。

また、学力調査などの結果は、出来る限り、保護者に対して伝えていきます。厳しい結果が出たならば、それと改善策を伝えて、協力を求める態度も大切だと考えています。

校長の役割

教師が一丸となって子どもを伸ばす共通理解を持つ

——子どもが伸びる学習評価を行うために、校長として何をすべきだとお考えですか。

平山 評価というと、「大変」「面倒」という意識が強いかもしれませんが、校長として、まず、しっかりとした考え方を示して校内で共通理解を図ることが大事です。校内研修や職員会議などを通して、「こんな授業を目指そう」「こういう場面を捉えて評価しよう」「通知表はこうしよう」といった方向性を、教師間で共有できるようにしています。

校長の考えが教師の考えに影響を与え、その結果、子どもを伸ばせるかどうかが決まると言っても過言ではないでしょう。学習だけ

図5 評価の取り組みを進めるポイントと授業を見る視点

◎ 評価の取り組みを進めるポイント

- 1 指導と評価の充実を一体的に考える
- 2 評価の目的について合意形成を図る
- 3 評価と評定を区別し混同しない

◎ 授業を見る観点

- 1 その時間の目標（ねらい）は何か
- 2 目標に沿った指導の流れになっているか
- 3 目標の実現状況が把握される場面はどこか
- 4 その場面では子どもの学習状況をどのような方法で見極めようとしているか（評価方法、評価規準、観点）
- 5 つまずいている子どもへの支援方法を具体的に考えているか

*北先生のお話を基に編集部で作成

ではなく、人としての基礎・基本を学ぶ小学校段階においては、教師が一丸となって子どもを伸ばすという意識が特に重要だと思えます。また、子どもが伸びるきっかけはそれぞれですから、そのきっかけをきちんと見付けられる教師を育てていくことも、校長の役割ではないでしょうか。

北 評価の取り組みを進めていく上で、校長先生に意識していただきたいポイントと授業を見る観点をまとめました（図5）。個々の先生方の指導や評価を高めるために、ぜひ意識していただきたいと思っています。

学習評価は、子どもの成長の記録であると同時に、指導改善に生かすという点で、学校評価や教員評価のねらいと同じだと考えます。学習評価を進める上では、より良い方法に気付いたら常に修正するという視点も求められるでしょう。

——本日はありがとうございました。

学びの軌跡を残す評価で 子どもたちの成長の実感を高める

香川県 香川大教育学部附属高松小学校

香川大教育学部附属高松小学校の子どもは、学力は高いものの、テストの結果に目が向きがちで、自己評価が低い傾向が見られた。そこで、学習課題の内容を見直すと共に、個性を大切に、思考力などを適切に評価する方法を導入。徐々に協同して学び合う姿が見られるようになってきた。

背景・課題

- ◎学力は高いが、行動よりも考えが先行し、多様な体験が不足していた
- ◎結果に目が向きがちで、自己評価が低かった
- ◎多様な人間関係づくりに課題が見られた

評価に関する取り組み

- ◎思考力・判断力・表現力などを育む「パフォーマンス課題」を導入。同時に、思考力などが見えやすい評価方法を取り入れ、子どもの問題解決の過程を把握しやすいようにした
- ◎6年間の学習の軌跡を記録した作品集（ポートフォリオ）を作成。子どもが自信を深めるきっかけとした

成果

- ◎子どもが学習課題を「自分自身の問題」と捉え、前向きに取り組むようになった
- ◎問題解決型の学習を通し、協同して学び合う姿が目立つようになった
- ◎教師による子どもの理解が進み、指導と評価の一体化が深まった

背景

全体的に学力は高いが
自己評価の低い子どもたち

香川県高松市の中心部に位置する香川大教育学部附属高松小学校には、市全域から子どもたちが通う。教育熱心な保護者が多く、新しい取り組みにも協力を得られる環境にある。子どもの学力は総じて高いが、その半面、持っている情報に行動が伴わず、多様な体験が少ないという課題もある。

背景の1つには、実質的に校区がないため、地域社会の中で子どもが人間関係を構築する場がほとんどないことが挙げられる。そのた

S c h o o l D a t a

◎1890(明治23)年に開校。香川大教育学部の附属校として、教育の理論と実践に関する研究を行う。2010年度から「自ら学び、自信をもって共に伸びる子の育成」をテーマに研究を進めている



校長 柳澤良明先生

児童数 672人 学級数 19学級

所在地 〒760-0017 香川県高松市番町5-1-55

TEL 087-861-7108

URL <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~takasyo/>

公開研究会 2013年2月7日(木)、8日(金)予定

子どもが伸びる学習評価

め、集団の中で力を発揮することが苦手な子どももいるという。副校長の滝川稔先生は次のように話す。

「多くの子どもが、テストの得点や評定値などに目が向いてしまい、自分の良さや努力したことに気付けなくなっていました。毎年、子どもから取っているアンケートでも、『もっと出来るようにならないといけない』などと、自分に厳しい評価をする子どもが目立ちます。そのため、学習活動を通して、『一人ひとりの良さが授業の中で生きている』というメッセージを、強く発信していく必要があると感じています」

探究活動や縦割り活動で自己肯定感を育む

こうした課題を踏まえ、同校は、通常の「科学習」に加え、「楷の木活動」「ふれあい学習」を教育の3つの柱に据えている。

楷の木活動は、自ら学び自ら考える子どもの育成を目指し、自己肯定感を高めることをねらった学習活動だ。3年生から始まり、年間を通して1つのテーマを探究する。

3～5年生はコースを選択し、6年生は個別にテーマを設定する。例えば2011年度、4・5年生のコースには、「災害について―東日本大震災について調べ、今、自分出来ることを考え、実際に行動して多くの人に呼びかける―」ものづくり―小さい子や友だち、

家族などが楽しんだり喜んだりするものをつくったり、発明したりする」などがあった。

6年生は一歩進んで、個々の問題意識からテーマを設定する。「捨て犬の現状を調べ、その数が減るように多くの人に呼び掛けた」「身近なことや感じたことを絵手紙にして、お世話になった人に感謝の気持ちを込めてプレゼントしたい」など、子ども一人ひとりが自分で決めたテーマに取り組んだ。

ふれあい学習は、地域社会とのつながりが弱く、人間関係づくりが難しいという課題に対応して始めた。学年縦割りの班を中心として、遊びや清掃、栽培活動、共同給食などを継続的に行い、多様な人間関係の中で個性を発揮する機会を設けている。

■評価の工夫①


子ども自りに課題を見いださせ思考力や判断力などを見取る

教科学習においては、07年度から「活用する力」に着目した「パフォーマンス評価」の研究を始めた。10年度からはこれを発展させ、思考を重視する単元で、子ども自らが課題を見いだし解決していくような「パフォーマンス課題」の研究に取り組んでいる。研究主任の廣瀬貴志先生は次のように説明する。


「以前の研究では、子どもに知識を与え、それらを活用する課題に取り組み授業が中心でした。教師から課題を与えられるという点



香川大教育学部附属高松小学校校長
柳澤良明 やなぎさわ・よしあき
「あいさつをしつかりし、皆が学校に来てよかったと思えるような、世界一元気な学校を目指す」



香川大教育学部附属高松小学校副校長
滝川 稔 たきがわ・みのる
「副校長として、その時々最善を尽くす。また、子どもと接する時間を出来るだけ長く持つ」



香川大教育学部附属高松小学校
研究主任
廣瀬貴志 ひろせ・たかし
「喜びも悲しみも分かち合いながら、学び合える子どもたちを育てたい」

で、子どもにとつては受け身の学習であり、生き生きとした姿があまり見られないという反省がありました。そこで、10年度からは、子どもに自ら課題を見いださせ、『自分自身の問題』として取り組ませるような授業を目指して、研究を進めています」

4年生社会の「ごみのしよりと利用」(全14時間)を例に見てみよう。授業は、根幹となるイメージや資料などを提示することから始まる。最初の3時間は、ごみのイメージについて話し合い、高松市の年間のごみの量の変化を調べる。ここで、子どもたちは年々増えていたごみの量が1998年頃から急に減り始めていることに気付いた。「どうして減っているのだろうか」という疑問を抱き、ごみの処理の仕方などへの関心に移っていく。

このように、子どもに課題意識を強く持たせることで、ごみ処理やリサイクルについて調べたり、ごみを減らす方法を考えたりするなど、主体的に学習できるようにしている。

「課題は日常生活で身近に感じられるものを設定し、子どもが目的を明確にして問題解決を出来るようにしています。あらかじめ教師が課題を想定し、子どもがそれに気付くように促すこともあります。どちらかという、課題の内容にある程度の幅を持たせておき、子どもが話し合っただけで決められるようにしています。そのほうが、子どもの課題意識がより強まるからです」(廣瀬先生)

子どもが課題を検討する際に、教師が留意しているのは、動機付けはあるか、ゴール(方向性)は明確か、全体の見通しを持って学習を進められるか、協同する場面はあるかといったことだ。

課題に対しては、「ループブリック(評価指標)」を用いる。評価はA・B・Cの3段階とし、子ども一人ひとりの問題解決的思考を見取る。例えば、「ごみのしよりと利用」のループブリックは次の通りだ。

A 社会事象などに問いをもち、既有的知識や身の回りの事象とつなげながら予想し、問題解決に迫るための道筋を表現している

B 社会事象などに問いをもち、既有的知識や身の回りの事象とつなげながら予想している

C 社会事象などに問いをもっている

「客観性や妥当性を持たせるため、ループブリックは、発達段階などに関する校内全体の議論を基に作成しています」(廣瀬先生)

■評価の工夫②

成果物を1冊にまとめ 成長と学びの連続性に気付かせる

通知表をはじめとした学びの成果の評価にも工夫を凝らす。1つは、入学時から自分の学びの軌跡を作品集(ポートフォリオ)にまとめていくことだ。社会科で作った歴史新聞、理科で行った実験のまとめ、夏休みの絵日記、学期ごとの振り返りプリントなど、授業で書いたものをファイルにとじていく。楷の木活用、ふれあい学習用のファイルもある。

「ファイルは所定のロッカーに入れており、子どもは自分のファイルを見て、伸びを実感したり、自己分析をしたりしています。学びの過程の記録にもなるため、単元間のつながりを感じ取ることが出来るようになります。また、子ども同士で作品集を見せ合う場面も設け、学び合いも促しています」(廣瀬先生)

更に、各ファイルから活動の振り返りなどのエッセンスとなる部分をまとめて、従来の通知表に当たる「学びの光」というポートフォリオ(写真)にする。これを2年間で1冊作成。卒業時には3冊が完成することになる。

「『学びの光』には6年間の学びの流れが記

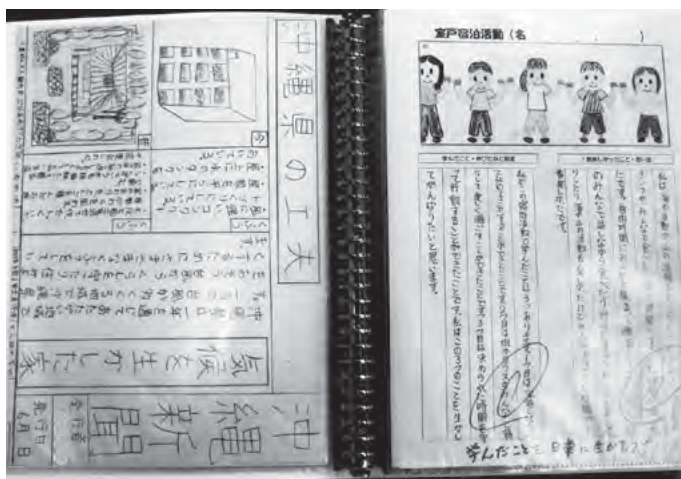


写真 子どもの学びの軌跡をまとめた「学びの光」。6年間を通しての成長が自分でも分かり、自己肯定感につながる。多くの子どもにとって、作品集は宝物になるという

録されることになり、卒業時には自分の思考力や表現力などの成長が手に取るように分かるものとなります。学期ごとに家庭に持ち帰り、保護者にも目を通すようにしてもらっています。『何を学んでいるかが分かりやすい』と好評で、学校の教育活動への信頼感にも結び付いていると感じます」(滝川副校長)

もう1つは、文部科学省が示す観点を参考にして、独自に研究し作成した評価観点だ。教科の評定と楷の木活動、ふれあい学習の振り返りシート(図)から成る。思考力のように目に見えにくい力や態度が評価の対象となる部分では、個々の子どもが自分の伸びを実

子どもが伸びる学習評価

図 4年生2学期『楷の木活動振り返りシート』

4・5年

自分の課題：自分たちの地域を盛り上げるために、その地域のことを調べたり、盛り上げるための作戦を考えたりして、香川のPRイベントを開催しよう。

2学期の自分の成長をみつめてみましょう。

○→よくできた ○→できた △→がんばろう

継続	課題解決に向けての活動が継続している、粘り強く課題解決を行っている。	○
協同	友達や先輩から人化聞き出し、調整している。自分や友達の得意のよさについて、役割を担ってはついている。	○
創造	課題解決に向けて、新しい自分の考えを生み出している、自分の活動を見直し、いろいろな見方で解決方法を探している。	○

特に成長したと思う事
 成長したと思ふ事は結構あります。
 1つ目は、PRのためにどういう方法で来てもらうかの自分の意見をみんなに積極的に伝えた事です。前は、自分ではなかなか言えなくて、人の意見ばかり聞いていたけれど、今は、「ここは犬島の特産品など書いて」とか、資料紙でかき出して発表して、それに対して「そこそこいい」とか、皆さんの意見をのべられるようになりました。
 2つ目は、ずっと交流を続けていたこと。3年生のころから、大島青空園の入所者の方と手紙や、おくり物で交流を続けていました。今回は、おくり物から、「2月11日の発表を前に来て下さい」と手紙を送りました。さらに、その方から手紙をもらって、質問に答えてもらったりしました。また、活動も続けたいです。

続けたいことや生活に生かしたいこと
 上でもおりましたが、まだまだ交流を続けていきたいです。さらに、もっと犬島のPR活動や、PRの場所を広くしていきたいです。
 生活に生かしたいことは、犬島で教わった「差別なくいひこと」です。犬島だけでなく、体のしろうこをもっている人にもやさしくしたいと思います。

先生から
 「みんなの努力と笑顔の姿、みんなのPR活動、犬島がますます盛り上がるのを喜んでいました。心掛けて活動してほしいです。また、これからも犬島の特産品や、犬島の現状に気を配ってほしいです。」

*同校の資料をそのまま掲載
 学期ごとの「評価観点」（同校は2学期制）は Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトからダウンロードできます
<http://benesse.co.jp/berd> →「情報誌ライブラリ」(小学校向け)

を踏まえ、今後は、更にカリキュラムを改善する予定だ。また、12年度中に今までの実践をまとめ、研究に一区切りを付けてやると考えている。

学校で学ぶことの大きな意味だと感じます」
 高まっています。このような学び合いこそが、問題解決の過程で自分の意見を発表し、皆で討議する姿勢も身に付き、認められたり反対されたりする体験を通して、思考力や表現力が高まっています。このような学び合いこそが、テーマを学ぼうと、子どもなりにこだわりを持って取り組むようになりまし。また、問題解決の過程で自分の意見を発表し、皆で討議する姿勢も身に付き、認められたり反対されたりする体験を通して、思考力や表現力が高まっています。

「子どもにどのような力を付けたいか、どのような授業や指導をすべきかの検討自体が、規準づくりそのものであり、評価を考慮することにもつながると捉えるようになりまし。つまり、評価づくりは、子どもを生かす、育てることに直結していると思います」
 学習評価で見えてきた子どもの実態や課題が、規準づくりや指導をすべきかの検討自体が、規準づくりそのものであり、評価を考慮することにもつながると捉えるようになりまし。つまり、評価づくりは、子どもを生かす、育てることに直結していると思います」

■成果

評価づくりの過程で改めて子どもに付けたい力を考える

感できるように、具体的な観点が示され、教師と対話しながら記入する形をとっている。

保護者には、保護者会などで育てたい子ども像や学習内容を繰り返し発信していること「生きる力」を育てることの本質的な意味が徐々に理解されつつあるという。

また、学習課題や評価を見直すことは、教師にとっても将来を見据えて子どもに付けた力を改めて考え、内容を深めるきっかけにもなったと、廣瀬先生は話す。

「子どもにどのような力を付けたいか、どのような授業や指導をすべきかの検討自体が、規準づくりそのものであり、評価を考慮することにもつながると捉えるようになりまし。つまり、評価づくりは、子どもを生かす、育てることに直結していると思います」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

私は本校と大学を週に何度か行き来する、特殊な立場にあります。私の考える校長の役割は、研究を推進するために先生方が自分の考えを遠慮なく言い合えるような雰囲気づくりをすることです。また、先生方がきちんと議論を出来る時間や場を確保することも心掛けています。

対外的には、保護者や卒業生、大学とのパイプ役になることを大切にしています。支援いただいている方に、感謝と共に成果をしっかりと伝えるようにしています。

校長 柳澤良明先生

ミドルリーダーの役割

校長や副校長のリーダーシップの下、先生方が同じ方向を向いて研究が出来るように、具体的な目標や方策などを示すことを大切にしています。そのためには、一人ひとりの先生方が自分の課題に向き合った研究が出来るという自由度と、学校全体の方向性を見失わないというバランスを取ることが重要です。また、何よりも子どものための研究であることを常に校内に示すことも、私の役割だと思っています。

研究主任 廣瀬貴志先生

子どもを評価に参画させて 自己評価力や自尊感情を育む

奈良県 御所市立葛小学校

御所市立葛小学校は、小規模校ゆえに、子どもの中で序列化が生じていたのが課題だった。そこで、興味・関心を喚起しやすい課題を設定すると共に、自己評価の場面を重視したところ、子どもが自分から積極的に考えるようになり、学力の序列も崩れてきたという。

背景・課題

- ◎少人数のため、子どもの意識の中で学力の序列が固定しやすかった
- ◎多人数でもまれる体験が少なく、活気に欠けている面もあった

評価に関する取り組み

- ◎知識の「再生」ではなく、知識を組み合わせて考えるような課題を出す
- ◎目標から考えた課題を設定する
- ◎学習の成果を客観的に自己評価する場を設ける
- ◎複雑な思考が出来るように、学年に応じた方法を取り入れる

成果

- ◎学力の序列ではなく、自分自身の成長に目が向くようになった
- ◎子どもが積極的に発言するようになり、話し合いが活発になった
- ◎教師が子どもの気持ちや意欲をよく見取るようになり、授業が改善された

S c h o o l D a t a

◎御所市立朝町小学校と戸毛小学校が統合して、1982（昭和57）年に開校。同市立葛中学校と同じ敷地内にあり、4・3・2年間のブロックを設けて小中一貫教育に力を注いでいる



校長 丸山恒央先生

児童数 70人 学級数 7学級（うち特別支援学級1）

所在地 〒639-2252 奈良県御所市樋野270

TEL 0745-67-1448

URL なし

公開研究会 未定

背景

じっくり考える課題で 二元関係の序列化を崩す

のどかな農村地帯に位置する御所市立葛小学校は、全校児童70人という小規模校だ。昔から教育熱心な地域であり、塾に通う子どもも多く、多い年には卒業生の3割程度が私立中学校に進学する。子どもは全体的に穏やかで朗らかな性格だが、少人数のために人間関係が固定化しやすいことが地域的な課題だと丸山恒央校長は話す。

「多人数の中でもまれる体験が少ないためか、子どもたちは少し活気に欠けているよう

子どもが伸びる学習評価

です。少人数ゆえに、子どもの中で学力などの序列が出来やすいことも課題でした」

子どもの序列化を崩し、それぞれの可能性を伸ばしていくためには、自己評価の機会を設けて、自尊心を高めることが必要ではないか。そうした考えから始めたのが「パフォーマンス課題」だ。児童・生徒支援教員の福本義久先生は次のように話す。

「パフォーマンス課題は『子どもの思考を可視化する課題』と捉えています。子どもにも、『君たちが考えていることを全て出してもらおうための問題』と説明しています」

例えば、「発芽に必要な条件を答えよ」は知識を問う問題であり、知っていれば答えられる。一方、パフォーマンス課題は「店で売っている種子は、そのままではなぜ発芽しないのか」というように、学んだ知識を用いて説明することが求められる。そのため、発芽の条件を知っている子どもでもなかなか説明できないと、福本先生は話す。

「知識を『再生』するのが得意で、発芽の条件をすぐに答えられたとしても、『思考』が得意とは限りません。逆に、『再生』は苦手でも、知識を組み合わせて『思考』することが得意な子どももいます。このような力を引き出し、目に見えるようにするのがパフォーマンス課題です。従来の授業では、教師が子どもに対して再生力や記憶力を求めているというメッセージを発信してしまっ

たことが、思考力・判断力・表現力を伸ばせない要因だったのではないかと思います」

評価の工夫①

目標から考えた課題で学びの焦点を絞り評価をしやすくする

課題は子どもに付けたい力から考えて設定するように工夫している。

「教師自身が『最終的に子どもに何を理解させるか』を端的に言語化できなければ、本来、課題は設定できないはず。最終目標から逆算して考えて課題を設定することによって、子どもが何をどこまで理解したかが分かりやすくなり、適切な評価が出来るようになりました。評価は子どもの育ちへのまなざしと考えています」（福本先生）

2011年度に新採で赴任した中尾真也先生は、目標から考えて授業づくりをするようになって、授業が大きく変わったと話す。

「当初、私は『自分はこう教えた』という意識で授業をしていましたが、授業のねらいが絞り切れず、子どもは授業に集中できていませんでした。福本先生に、まず『子どもに何を学ばせるか』という1点を明確にし、それから『授業の振り返りで子どもに書いてほしいこと』を想定し、授業の展開を考えると良いと言われました。そのように授業構成を改めたところ、子どもが積極的に発言するようになりました。話し合いが活発になった



御所市立葛小学校校長
丸山恒央 まるやま・つねひ

「教育者として、自分自身の人となりや生き方を常に見直し、謙虚であり続けたい」



御所市立葛小学校
福本義久 ふくもと・よしひさ

児童・生徒支援教員、理科専科。「子どもが『力を付ける場』から『力を発揮できる場』に学校を変えたい」



御所市立葛小学校
中尾真也 なかお・しんや

3学年担任。「自分らしさを忘れずに、夢に向かって諦めない子どもを育てたい」

ことは、学級運営にも好影響を与えています。課題の内容は、子どもの関心を高め、課題を身近に感じさせるために、社会の出来事やテレビの人気番組を題材とすることがある（P.16図1）。福本先生は小学生向けのテレビ番組を見て、そこから課題のヒントを得ることも多いという。

評価の工夫②

学習を自己評価させて 次の授業への意欲を育む

課題が終わると、クラス全員分のパフォーマンスをコピーして配布し、その中から「ベストワーク」を決める。課題の達成にはどのような条件がそろっていればよいかを「ジャッジの基準」として子どもたちに出し

合わせた上で、それに基づいて最も良いと思うものを選び、根拠も記入する(図2)。

『ジャッジの基準』として、子どもは課題解決のポイントをもう一度考えることとなります。この過程によって、自分のワークはどうか良かったか、どこが足りなかったか、自己評価が出来ます。『次はここに気を付けて、自分がベストワークに選ばれたい』という学習の動機付けにもなります(福本先生)

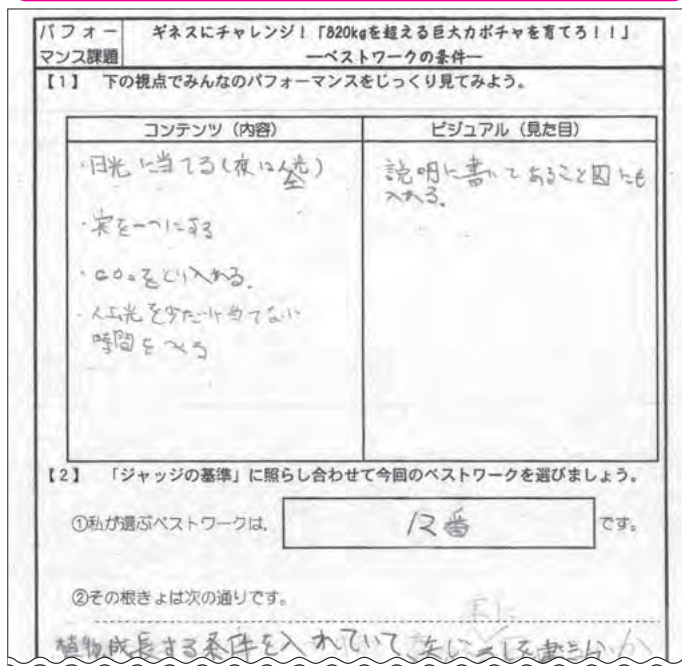
もう1つ重要な点は、この自己評価がクラスの学力の「序列」を崩していることだ。

図1 6年生理科の「パフォーマンス課題」の例



ギネス記録を題材としたパフォーマンス課題。単元の最初に課題を示すことで、子どもは課題を解決するために必要な知識を得ようと、授業に積極的に取り組む
*同校の資料をそのまま掲載

図2 パフォーマンス課題後に行う「ベストワークの条件」



課題後、子どもが評価規準を話し合い、それに照らしてベストワークを選ぶ。自己評価の場として、同校が重視する子どもを評価に参画させる取り組みだ
*同校の資料をそのまま掲載

「誰かと比べての優劣ではなく、自分自身の学習に目が向くことで、クラス内の序列は気にならなくなります。実際、ベストワークに選ばれる子どもは課題によって違います。知識を組み合わせた抽出したり、それを分かりやすく説明したりする力は、従来の『再生』の序列とはあまり関係がなく、子どもの関心や集中力などが大きくかわっていることを実感します」(福本先生)

パフォーマンス課題は主に5・6年生が対象で、低・中学年の時期はその基盤となる力の育成に力を入れる。例えば、低学年で書くひまわりの観察日記では、それを4コマ漫画

風に表現させる。子どもは、「種をまく」「発芽する」「花が咲く」「枯れる」といったポイントを抽出して描く。重要な情報を焦点化して組み立てるための訓練の1つになる。

中学年では、その時間に学んだ内容を写真サイズの小さなカードにまとめる(写真)。

「子どもは用紙

に合せて書くこととする傾向があるため、大きな紙では余白を埋めようとして繰り返し同じ説明をしたり、ポイントとずれた内容を書いたりして、最も大切なことを焦点化できていないことがあります。これを防ぐために、意図的に小さい用紙を配布して、大切だと思ったことだけ書けるようにしています」

成果
成果物をデジタル化し
自己評価をしやすくする

パフォーマンス課題を取り入れた結果、子ども内の序列が崩れ、自己評価によって自分

子どもが伸びる学習評価

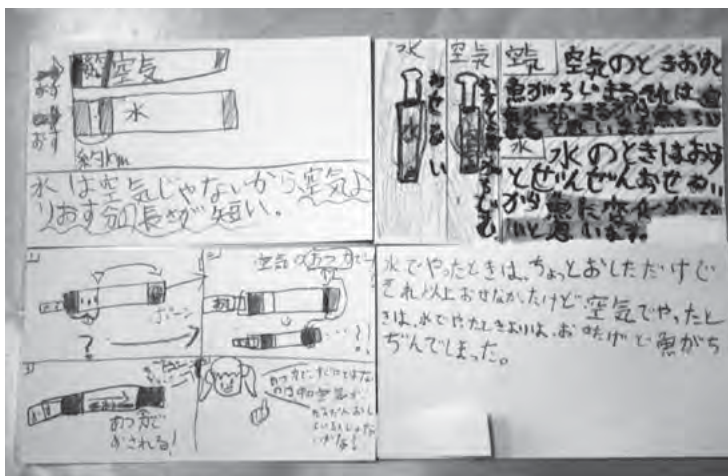


写真 4年生の理科で実験の結果をまとめたカード（4人分を掲載）。子どもによって、4コマ漫画を描いたり、文章だけで説明したりと表現方法は異なる *同校の資料をそのまま掲載

を高めようとする意識が育ってきた。事後アンケートでも、大半の子どもが「学習したこと」や「自分のパフォーマンスの良さや足りないこと」が「よく分かった」と答えている。「他者からの評価が中心となるのは学校に通う時期だけで、社会に出ると上司などの評価はありますが、自己評価でできる力が強く求められます。そうした力を小学校から付けさせたいという思いがあります」（福本先生）

今後、充実させたいと考えているのが「デジタルポートフォリオ」だ。一人ひとりにSDカードを持たせ、国語の音読、体育や音楽

のパフォーマンス、図工の作品といった画像や動画、音声を記録するものだ。例えば、音読は、誰かに聞いてもらうよりも、自分の音読の様子を動画で見ることが、もっと良くしたい点が意識でき、成長も実感しやすいと考える。

一連の取り組みを振り返り、丸山校長は次のように話す。

「教職歴が長いほど、自分の指導の型をつくってしまう傾向があるのは否めません。『子どものために』と考え、あれもこれもと詰め込み式になり、逆に子どもを勉強嫌いにさせてしまうこともあります。パフォーマンス課題に取り組んだことは、教師が自分の型を崩し、子どもの気持ちや意欲を優先する指導を考えるきっかけになったと思います」

また、パフォーマンス課題を教師それぞれが得意な教科から始めることもポイントだと言う。教師自身が子どもの変化を実感し、楽しめることが継続的な取り組みにつながるからだ。

「私は理科で取り入れています。別の教科の授業でも、子どもが『端的に言う』といった説明が出来るようになったり、『組み合わせで考えよう』という発想が出たりするようになりました」（福本先生）

同校は、出来ることから始め、子どもの成長を確認しながら実践内容を進化させていくという方針を、これからも続けていく考えだ。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

私が大切にしているのは、先生方との日常的な雑談です。私の教育に対する思いが伝わり、それが教育活動に反映されたらうれしいですね。

先生方の多くは偏差値競争を勝ち抜いて教師になったわけですが、その価値観から抜け出し、子どもに学びの楽しさを感じさせ、子どもを育む喜びを体験してほしい。そのためにも、私も先生方も、子どもの心を知りたいと思えます。

校長 丸山恒央先生

ミドルリーダーの役割

校長先生が示した学校経営方針を具現化していくのが、私の役割だと考えています。方針に対する解釈は、先生によって違うこともあります。そこで、まず私が実践して結果を見せて、何が求められているのかを具体的に示します。そして、課題を先生方と一緒に考えていくようにしています。

また、必要に応じて「研究通信」を発行し、研究内容を伝えて目線合わせをするように心掛けています。

児童・生徒支援教員 福本義久先生

単元ごとに児童の評価を蓄積し 丁寧な支援に生かす

茨城県 高萩市立東小学校

学力の伸び悩みが大きな課題となっていた高萩市立東小学校。2008年度から、評価に関する研究を始めたのを機に、問題解決型の授業を導入した。指導と評価の一体化を図った結果、基礎・基本が定着し、成果は目に見える形で表れている。

背景・課題

- ◎学力が低迷し、「全国学力・学習状況調査」などの結果は全国・県平均を下回っていた
- ◎保護者の教育への関心はあまり高くなく、勉強は学校に任せているという雰囲気があった

評価に関する取り組み

- ◎子どもを伸ばすための評価の研究に取り組み、指導と評価の一体化を図った
- ◎問題解決型の授業を取り入れ、評価規準や座席表などの評価方法を工夫した
- ◎県一斉に行う「学力診断のためのテスト」の結果を分析して、指導に生かした

成果

- ◎算数での「指導と評価の一体化」を軸にした授業改善が、他の教科にも波及した
- ◎「学力診断のためのテスト」の結果が飛躍的に向上した
- ◎教師が指導に責任感を一層持つようになった

背景

「勉強は学校に任せている」地域で学力に大きな課題

高萩市立東小学校は、2008年度に国立教育政策研究所の指定で、評価に関する研究を始めた。子どもは元気で活発であるが、学習への主体性は弱いという課題があった。また、同校がある地域は教育への関心が高くない、保護者の家庭学習への理解もあまりない状況だった。

そうした影響もあり、子どもの学力は全体的に低く、文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果は全国・県平均を下回っていた。

S c h o o l D a t a

◎1958(昭和33)年創立。「友愛」「自立」「礼儀」「健康」が校訓。2008年度から3年間、国立教育政策研究所の指定で「確かな学力をはぐくむための指導と評価の研究」に取り組んだ



校長 大内富夫先生

児童数 298人 学級数 14学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒318-0012 茨城県高萩市有明町1-141

TEL 0293-22-2542

URL <http://edu.city.takahagi.ibaraki.jp/higa-es/>

公開研究会 未定

子どもが伸びる学習評価

研究主任の木村裕子先生は当時を次のように振り返る。

「研究指定を受けたものの、3年間で成果が上がりなかつたらどうしようという不安がありました。どうすれば子どもを伸ばす評価が出来るのか、学校全体で検討しました」

検討の結果、研究テーマは、指導と評価の一体化を図り、子ども一人ひとりを丁寧に見取りながら指導を改善することとした。対象は、算数の「数と計算」に絞った。

■評価の工夫①

問題解決型の課題を取り入れ 評価規準をより具体的に明示

まず取り組んだのは、学習のきまりを定着することだった。定規や下敷きなど決められた学習用具を必ず持つてくるように徹底するなど、授業態度の指導から始めた。

同時に、授業は問題解決型を土台とし、流れを統一させた。授業の冒頭で、問題を提示する。児童は「分かっていること」には実線、「聞かれていること」には波線を引く。更に、見通しを持たせ、本時の課題をつかませる。次に、児童は個別に課題解決に取り組む。そして、ペアやグループになり、自分の考えを発表したり、全体で話し合ったりして結果をまとめる。最後は、授業の理解度を測る「評価問題」に取り組み、自己評価を記入して、授業の振り返りをする。

評価は、子ども一人ひとりの取り組み、評価問題、振り返りカードの結果を踏まえて行う。子どもを適切に見取るために、単元ごとに評価規準を作成した。工夫したのは、規準をより具体的に明記し、C評価からB評価に引き上げる手立ても盛り込んだことだ(図1)。

「単に評価はCとするのではなく、Cの子どもが授業を理解できるようにすることが重要だと考え、評価規準に支援の手立てを明記することにしました。一方、A評価も、規準に達していればそれで終わりではありません。ABCの状態を明確に言語化したことで、教師が子どもを見取りやすくなり、その後の手立ても考えやすくなりました」(木村先生)

■評価の工夫②

各授業の評価を座席表に表し 単元を通して支援をする

評価を指導に生かすために活用しているのは「座席表」だ(P.20図2)。これは、座席と同じ順に、子どもの授業ごとの評価を書き込める用紙で、単元ごとに作成する。

図2を例に見てみよう。左に座る子ども「ア」は、1時間目はC評価だった。教師のメモには、「数直線のかき方」が「×(出来なかつた)」だったため、次の時間は支援として「ヒントカード」を用いると記されている。その結果、2時間目には理解が深まり、



高萩市立東小学校校長
大内 富夫 おおうち・とみお
「小学校時代に種をしっかりと植え付けてあげれば、適切な時期に自らの力で開花していく」



高萩市立東小学校
木村 裕子 きむら・ひろこ
研究主任。「子どもたちのために」を第一に考え、「わかった」「できた」という喜びを伝えたい」

B評価になった。子ども「イ」は、1時間目はB評価だったが、2・3時間目はA評価となっている。

「B評価からA評価へと理解を高める指導には、『どうしてこう考えたのか』といった

図1 評価規準の例 5年生算数

評価規準	A: 十分満足な状況	C: 努力を要すると判断された児童への具体的な支援
	<ul style="list-style-type: none"> 除数が帯小数の場合にも除法の意味を拡張してとらえ、既習の整数の除法に関連付けて、小数で割る除法の計算の方法を考えようとする。 小数の割り算の意味と計算の仕方を計算のきまりや数直線、図などを使って考える。 	<p><発表・ノート・振り返りカード・評価問題></p> <ul style="list-style-type: none"> A 既習の整数の除法を積極的に生かし、小数で割る除法の計算方法を考えようとしている。 図、数直線、言葉、式を用いて、2.4を整数化するために96と2.4を10倍して計算し、計算の仕方を言葉で説明することができる。 C 整数の除法の形にすることで、既習の計算方法が生かせることをおさえる。

評価規準と共に、十分ねらいを達成している状態と、必要な支援を具体的に記している
*同校の資料を一部抜粋して編集部で作成

教師の補助発問によって考えを深めさせたり、発表や話し合いを通して友だちの考えを聞き、新たな考えを獲得させたりすることなどがあります」（木村先生）

授業の終盤に行う評価問題は、子どもの授業の理解度を把握するために重視する。主に知識を習得するための授業では、知識を問う評価問題を出す。考え方を学ぶ授業では記述式問題にして理解度を測る。

「授業は、最終的に評価問題が解けることを目指して計画しますから、解けない子どもがいれば、指導に課題があったということになります。子どもにとつて適切な授業だったかどうかは、この評価問題に反映されるのです。その結果を踏まえ、教師は次の授業を計画し直します」（木村先生）

研究が進むにつれ、評価問題の正答率は高くなった。子どもの学力が伸びたことに加え、教師がねらいを踏まえた授業を計画できるようになったことが大き

図2 座席表形式の評価記録用紙

ア				イ					
①	A	B	C	数直線のかき方 X → ヒントカード	①	A	B	C	テープ図
②	A	B	C	ヒントカード	②	A	B	C	数直線 プリントA
③	A	B	C		③	A	B	C	プリントA
④	A	B	C		④	A	B	C	
⑤	A	B	C		⑤	A	B	C	

単元ごとに座席と同じ順で評価を記入する表を作り、授業の評価を記録し、必要な支援などをメモする。単元を通した子どもの変容がよく分かる
*同校の資料を一部抜粋して編集部で作成

図3 「振り返りカード」 6年生算数の例

今日の算数はどうだったかな？（学習をふり返ろう）			
単元名		分数のわり算を考えよう	
6年 組 番		名前	
月	時間	今日の課題	自己評価(◎○△)
5/21	1	分数÷分数の計算のしかたを考えよう	分母のわり算も、整数のわり算と同じように式を立ててやることか分かった
5/22	2	計算のしかた	分数÷分数も公式があることか分かった
5/23	3	約分・整数のわり算を工夫	わり算でも中割り分ができて、整数も分数にできることが分かった
5/28	4	3つの分数と帯分数のわり算かけ算	帯分数では、分子と分母を別々にかけ算して、最後に帯分数に直すことができる
5/29	5	小数÷分数の計算のしかたを考えよう	小数÷分数は、帯分数に直すか、分数に直すか考えた
5/30	6	問題を解く	コツを覚えれば、かんたんにできた
5/31	7	どのような計算をするよいか考えよう	何を求めるときも、整数と同じように分数でもできることか分かった
6/1	8	それ以外の物の値段の求め方考えよう	問題をよく読めば、おこなう計算が分かることか分かった
6/4	9	雑誌の値段を求めよう	3パターンの中でほかの計算のわり算が、この問題で使えます
6/5	10	かえりける問題の答え合わせと自分の考えの検証	自分のまちがいの原因を自分でかき出すのが、よく分かった

「振り返りカード」に授業の最後に分かったことや自己評価を記入する。子どもの感想や理解度に合わせて、教師がコメントを返す
*同校の資料をそのまま掲載

という。

評価の工夫③

子どもの振り返りを教師がきちんと評価する

授業の最後に、子どもは「振り返りカード」にその授業の課題、分かったことや感想を書き、「頑張ったか」「分かったか」をそれぞれ3段階で自己評価する(図3)。カードは毎時間提出し、担任がその自己評価を確認する。「何が分かったのかを振り返ることで、次の授業につながります。『明日はこれをした

い」といった記述もあり、授業を計画する上の参考にもなります」（木村先生）
単元の評価には「評価補助簿」を用いる。これは、評価規準の各項目をA=3点、B=2点、C=1点と点数化し評価するもので、最後に全体の理解を確認する「総括の評価問題」の評価を2倍にして加えて計算する。例えば、評価規準が3つある場合、ある子どもは「(2+3+2+2×2)÷5」で計算され、平均は2.2と算出される。単元の評価は「AV2.5 B B 1.5 V C」であるため、単元評価はBとなる。

子どもが伸びる学習評価

また、茨城県が実施している「学力診断のためのテスト」（3～6年生で国語、社会、算数、理科）の結果も指導などに活用している。経年でデータを分析し、一人ひとりの弱点を把握。授業で補充指導をしたり、個別指導に生かしたりしている。

■成果

子どもの学力が大幅に伸び
教師の意識も変わる

3年間の研究成果の1つは、「学力診断のためのテスト」などの結果が飛躍的に向上したことだ。大内富夫校長はこう総括する。

「以前は、テスト結果が平均より10ポイント、良くない教科では20ポイントも下回っていましたが、10年度以降、3～6年生で、ほとんどの教科が平均を上回るようになりました。かつては市内で下位でしたが、今は上位に入るようになりました。指導と評価が改善された影響が大きいと思いますが、学習のきまりを整えたことや保護者に家庭学習への協力を呼び掛けたことも、好結果の要因だと考えています」

研究対象の算数以外の教科にも、指導改善が広がっていることも成果の1つだ。

「指導と評価の一体化により、子どもが授業の流れを理解したことを、他の教科でも生かしています。研究を通じて、『know how』ではなく、何のために指導や評価を改善する

かという『know why』に気付いたことで、先生方は大きく変わりました」（大内校長）

「指導や評価が変われば子どもが変わる」という事実を前にして、教師はこれまで以上に指導に責任感を持つようになり、研究に対しても前向きになった。現在は、国語の校内研究を進めている。国語の言語活動の研究は、自主的な取り組みだ。

「自己表現力を付けたいというのが以前からの願いでした。学力が平均レベルになり、やりたかった言語活動の研究に取り組みことが出来ました」（大内校長）

研究推進のため、教師の多忙感の軽減も図る。例えば、以前行っていた毎朝の職員会議は取り止めた。緊急時はメモやホワイトボードでの連絡で代用しているが、特に問題はないという。旺盛な研究意欲の背後にあるのが、「子どもたちのために」という思いだ。

「東日本大震災では、本校の校庭にも津波が押し寄せるなどの被害があり、子どもたちはそれぞれに心の傷を負っています。教師は必死に子どもを守り、今も精神面のケアに心を配っています。本来なら、勉強に集中できなくても無理はない状況ですが、教師の気持ちや伝わっているのか、子どもたちは前向きに育ってくれています」（大内校長）

そのような強い思いが根底にあるからこそ、研究によって高められた指導や評価の技法が授業の中で生きてくるのだろう。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

目的がぶれないように明確に示し続けるのが、リーダーの役割と考えています。そして、方向性を伝えた後、具体的な実践については、主任の先生方に任せることを大切にしています。また、先生方の「子どもたちのために」という思いが、形として現れやすいような環境づくりに力を入れています。何より、「ピンチを楽しみながらチャンスに変えていこう」とする校長の姿勢が最も重要なことだと思います。

校長 大内富夫先生

ミドルリーダーの役割

誰も1人で研究を進めることは出来ません。先生方の思いをくみ取って調整役になり、組織を動かしていくことが主任の役割だと思います。一人ひとりの教師が1歩ずつ前に進んで、チームとして動けるような体制をつくりたいと、いつも考えています。そのためには、「やらされている」のではなく、「やってよかった」という思いを持って研究が出来るように、研究内容を考えていくことも、主任の仕事だと思っています。

研究主任 木村裕子先生

多面的な評価方法によって 「自分と向き合える力」を付ける

京都大大学院教育学研究科准教授 西岡加名恵

指導の改善を目指す時、鍵となるのが学習評価だ。特に、思考力・判断力・表現力は、どのように評価をすると良いのだろうか。「生きる力」を育てる学習評価のあり方について、京都大大学院の西岡加名恵准教授に聞いた。



出典／「『活用する力』を育てる授業と評価 中学校—パフォーマンス課題とルーブリックの提案」(西岡加名恵・田中耕治編著、学事出版)

学習評価の現状と課題

指導改善に結び付く 評価が出来ていない

これからの学習評価のあり方を考えるために、まず現状の課題を整理しましょう。

1つめは、学習目標に対して適切な評価方法が設定されていないことが挙げられます。ご存じのように、新学習指導要領では思考力・判断力・表現力の育成が強調されており、小学校ではそれに対応する学習活動が充実してきています。ところが、評価方法は依然として客観テストなどが中心になりがちです。これでは、せっかく伸ばした思考力などを十分に評価できません。

2つめに、具体的な評価基準のあり方を再考する必要性が挙げられます。従来の評価基準はチェックリスト型が大半であり、正答率が何パーセントかといった観点で評価されてきました。しかし、思考力などの評価には、「出来た・出来ない」ということよりも、「どれくらい出来たか」といった定性的な視点が重要となります。チェックリストではそれを見落としてしまう危険性があります。

3つめに、評価が指導の改善に十分結び付いていないという課題があります。「指導と評価の一体化」はよくいわれることですが、評価自体が目的になっているケースが見受けられます。子どもの実態を踏まえた指導の改

子どもが伸びる学習評価



にしおか・かなえ ◎ パーミンガム大博士課程修了。鳴門教育大講師を経て、現職。専門は教育方法学。カリキュラム論・教育評価論の研究に力を注ぐ。著書に『活用する力』を育てる授業と評価 中学校・パフォーマンス課題とルーブリックの提案（学事出版）、『逆向き設計』で確かな学力を保障する（明治図書出版）など

善によって学力を向上させることが評価の目的であることを、いま一度意識する必要があると思います。

これからの学習評価のあり方

成果物によって

知識・技能を活用する力を測る

こうした課題を克服し、思考力・判断力・表現力を含めた学力を適切に評価するためには、さまざまな学習評価の方法を組み合わせる必要があります（図1）。

自動車の運転免許の取得試験に例えて説明しましょう。筆記試験は「知識」、実技試験

は「技能」を問うテストだと考えられます。しかし、運転免許の取得には「知識」と「技能」の点で合格しただけでは不十分で、路上検定も行われます。これは、リアルな路上の状況において、習得した「知識」「技能」を必要に応じて引き出しつつ「活用」する力を試す検定です。

同様に、教育活動においても、授業などで学んだ「知識」「技能」を、日常生活や将来の人生に「活用」できるかどうかを測り、評価することが必要なのです。

私は、学習評価の路上検定に相当する考え方として、「パフォーマンス課題」を提案しています。これは、子どもが生み出した作品

や実演（パフォーマンス）を評価する方法です。小学校では、レポートや絵、歴史新聞、観察記録、話し合い、発表などが課題として出されます。これは、知識と技能を活用して取り組むものですから、学力を多面的に見るためには最適な評価方法です。

しかし、作品や実演の評価基準は、必ずしも明確になっていないようです。教師の主観に偏ったり、評価の観点がずれていたたりする場合があることも否めません。そこで、出来るだけ一貫した評価にするために、ルーブリック（評価指標）を用います。

ルーブリックは、複数の教師の話し合いによって作成するものであり、評価に妥当性や信頼性を持たせます。例えば、子どもが作った作品を並べ、教師が付せん紙に評価を書いて裏面に貼っていきます。最後に付せんを表面に貼り直し、作品をレベル別に分類して特徴を読み取ります（P.24図2）。このようなルーブリック作りに共同で取り組むことで、教師の間で評価基準の共通理解が進むでしょう。更に、長期的ルーブリックを作れば、1年間、ひいては6年間を見通して子どもに付けたい力を意識できるようになります。

授業の成果を可視化する方法を取り入れる

アメリカでは、1990年代から2000年代にかけて、客観テストの結果によって学

図3 「本質的な問い」と「本質的ではない問い」の例

「本質的な問い」の例	「本質的ではない問い」の例 (「重要ではない問い」ではない)
1. その国の特徴は、どのように捉えられるのか？	1. 中国の人口は何人が？
2. 星は天球上をどのように動くのだろうか？	2. 今日の日の出の時刻は何時か？
3. この音楽のイメージは、どのように捉えられるのか？	3. この曲の名前は何か？
4. 自分の思いを色を使って表現するには、どうしたらよいのか？	4. 色はどのように分類されるのか？
5. 自分の言葉で自分の考えや意見を述べるには、どうすればよいのか？	5. 「もし～だったら」という表現は、どう作文すればよいのか？

「本質的な問い」は、一問一答では答えられないような問いであり、さまざまな知識や技能を総合することを促すような問いである。学問の本質に迫る問いであり、また、生活との関連が見えてくるような問いでもある

出典／「『逆向き設計』で確かな学力を保障する」(西岡加名恵編著、明治図書出版)

図2

3年生算数「重さをしらべよう」の課題で作成したルーブリック

尺度	記述語
レベル3 理想的	重さを正確に量るための方法を意欲的に考え、様々な重さの測定法の長所・短所を理解し、その場に応じた適切なはかりを選び、重さを正確に測定することができる。
レベル2 合格	重さを数値化し、普遍単位を使って表すことの良さに気づき、いろいろなはかりの正しい使い方や目盛りの読み方を身につけ、その場に応じた適切なはかりを選び、重さを正確に測定することができる。
レベル1 乗り越え させたい実態	測定物に応じた適切なはかりの選び方、正しい使い方、目盛りの読み方を身につけていないため、重さを正確に量れない。

出典／「『逆向き設計』で確かな学力を保障する」(西岡加名恵編著、明治図書出版)

従来、日本では、子ども同士による多様な教え合いや学び合いを重視することで、高い教育水準を保ってきました。それを支えた教師の指導技術の高さの背景には、校内研究などを通して教師同士が学び合う文化があったといえるでしょう。これからも、そうした学び合いを大切にすると共に、これまでは見えにくかった思考力・判断力・表現力を可視化することで子どもの多様性を捉え、伸ばしていったいただきたいと思えます。

なお、パフォーマンス課題を作る際には、「本質的な問い」を考えることが大切です。それは、成績を付けるための問いではなく、子どもの「生きる力」を伸ばす問いです(図3)。

例えば、「模擬国連子ども会議で発表するために、平和のために自分たちが出来る意見書を作り上げなさい」という課題では、平

校の説明責任を求めようとする政策が導入されました。しかし、客観テストで評価できる学力は一部であるという反省から、子どもの実態をより定性的に見取っていかうとする考えが生まれた経緯があります。

日本でも、現在、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」などによって、学力の底上げが全国的に図られています。それはもちろん大切なことですが、その結果ばかりに目が行くくと、筆記テスト対策の反復学習が中心となり、子どもの学習意欲をそいでしまう危険性があります。

学力向上へとつながる効果的な学習評価を行うには、評価にめりはりをつけることも大切だと、私は考えます。多くの学校の評価計画は細かすぎて、教師が評価することに疲れてしまっています。

1学期に1つでもよいので、「この単元のこの活動を丁寧に見取ろう」などと焦点化することも必要ではないでしょうか。指導要録は法的に義務付けられているもので様式を大幅には変えられませんが、通知表は学校の方針を反映させてよいものです。「この単元では思考力・判断力・表現力をよく見るが、あの単元は知識と技能を重点的に見る」というような濃淡があってもよいと思えます。

また、これまで以上に「指導に生かす評価」を意識することも重要でしょう。評価は、子

指導を改善するための工夫
指導改善に結び付く評価を
含めた単元作りを

和のために自分たちが出来ることは何かを真剣に考えるでしょう。

「本質的な問い」は、生活の中で身に付けていった知識や技能を使って考えることも出来るため、暗記が苦手というような子どもを伸ばすことにもつながります。このような本質的な学習の機会が増えることを期待しています。

子どもが伸びる学習評価

子どもが指導によってどれだけ力を付けたのかを見取り、次の指導の工夫を考えるためにあります。

そのための単元作りで重要なのが、次に示す「はひふへほとさ」で表されるような7つの要素を意識することです。これは、元々、アメリカの評価研究者であるウィギンズとマタイが、「逆向き設計」論の中で提唱している考え方を、私が和訳したものです。学習評価において重要な考え方だと思いますので、それぞれ説明しましょう。

は はっきりとした見通しを与え、

子どもが主体的に学習に取り組むには、単元の最初から「今回は何を学ぶのか」という見通しを与える必要があります。

ひ 一人ひとりを惹きつける。

課題は一人ひとりにとって、魅力的なものでなくてはなりません。例えば、歴史新聞を作るに当たって、モデルとなるような作品を示して、やる気を引き出すのも1つの方法です。

ふ 不安がないよう留意させ、

思考力・判断力・表現力を発揮させるためには、単元を進める過程で材料となる知識・技能を与えて不安を取り除く必要があります。「自分に歴史新聞が書けるだろうか」というような最初に抱いた不安は、徐々に知識や技能を身に付けていくことで払拭されます。つまり、知識を与えてから応用

に移るといふ発想から、応用する機会を考へつつ必要な知識・技能を学ばせるといふ発想に転換するのです。

へ 下手なところは改めさせる。

最初から目標を十分に達成できる子どもばかりではありません。子ども同士の検討会などで、やり直し、修正する機会を与え、目標へと近付けていきます。

ほ 本人に自覚を促す自己評価。

どこが出来て、どこを改善しなくてはならないのか、子ども自身が正確に自己評価を出来るようにするための指導も大切です。

と ところで個人差、どうするか？

教室には多様な子どもがいますから、それぞれ足りない部分への支援を考える必要があります。例えば、読む力に課題を抱える子どもには、課題を理解させるための支援が必要でしょう。また、同じ課題でも、受け手によって魅力的であったり、そうでなかったりします。場合によっては、複数の課題を用意することを考えてもよいでしょう。

さ 最後に全体、見渡そう。

こうした単元の指導計画を立てる上では、さまざまな要素を取り入れる必要があります。現実には時間に限りがありますから、それらの要素の中で重要なものを取捨選択し、より効果的な指導が出来るように配置しましょう。

先生方への期待

多面的な学習評価で「生きる力」を育む

最後に、学習評価について考えるに当たり、そもそも学校はどのような場であるのかについて、立ち戻ってみたいと思います。社会に出ると、人と交渉したり、柔軟に対応したり、新しいものを生み出したり、メディアの発信する情報を理解したりと、さまざまな力が求められます。学校はそのような生きるために必要な力を平等に保障する機関だといえるでしょう。

「生きる力」と筆記テストで測る学力とはよく対比的に語られますが、それは違うと私は思います。筆記テストやパフォーマンス課題など、さまざまな方法で評価される力は、全て「生きる力」につながっています。

私が指導する大学生を見ていると、自分のやりたいことが分かっている学生は、困難にぶつかっても乗り越えられるだろうと感じさせる強さを持っています。外的な評価に左右されるだけでは、環境の変化に柔軟に対応できません。「自分がどこまで出来ていて、次に何を指したいのか」という自己評価力、つまり、自分と向き合える力を付けることを、小学校の段階から意識していただきたいのです。それは、多面的な評価によって育まれる部分が大きいと、私は思います。



今回のテーマ

外国語活動の授業を改善する工夫

2011年4月に外国語活動が5・6年生で必修化されて以来、約1年半が経った。

文部科学省から提供された「E, Friends!」を使って、どのように授業を構成すると良いか、指導を見直している学校も多いという。今号では、子どもの様子を丁寧に見取り、外国語活動の授業を改善している事例を紹介する。

事例 長野県佐久市立白田小学校

児童の実態を基に、聞く活動の改善点を部会で話し合う

教師に試行錯誤がある時こそ
子どもの実態把握が重要

佐久市立白田小学校は2010年

度から外国語活動の授業研究に取り組んでいる。研究1年目に、教育委員会会の指導主事や英語教育の研究者の助言を得ながら、授業展開案「白小プラン」(図1)を作成。外国語活動で最も重要なコミュニケーション力を付けるには、「相手のことを知る楽しさを持ち、繰り返し聞き慣れることが大切」との立場から、いかに楽しくかわりながら聞き慣れ

させていくかを工夫し、日々改善の努力をしている。研究は子どもの実態に応じて進めることを強く意識している。伊藤和子校長は話す。

「外国語活動は始まったばかりですから、先生方は試行錯誤しています。だからこそ、子どもの反応を丁寧に見取り、授業に反映させる必要があると考えています」

授業では毎回、「外国語活動ふりかえりカード」(図2)を配布し、子どもに、授業の楽しさや聞くことなどの評価、授業で良かったことや困ったこと、友だちの様子を見て気

付いたことなどを書いてもらう。このねらいを、5学年担任で研究主任の仲沢いずみ先生は次のように話す。

「段階を踏んで聞き慣れさせた活動が良かったか、ねらいがきちんと達成されたかなど、外国語活動のねらいや子どもの困り感を把握し、授業改善に生かしています」

研究部会は週1回、「外国語活動ふりかえりカード」を見ながら児童の実態を把握し、外国語活動を通じた相互理解や異文化理解が更に深まるよう、アクティビティやカルチャートークなどを検討(図3)。「白小

プラン」を改めていく。こうした改訂の意義を、6学年担任で教務主任の高橋英敏先生は次のように話す。

「子どもの実態に応じて授業を変えることで、より多くの子どもが友だちとのコミュニケーションを楽しめるようになると考えています」

井出眞一教頭は、研究の成果を次のように話す。
「子どもが英語に親しむにはどうすべきかを考え、外国語活動に積極的に取り組む先生が増えました。丁寧に子どもを見取り、研究を重ねたからこその変化だと思えます」

図1 白小プラン(2012年度版)

研究部会で挙げられた授業の改善点を反映して作成する授業展開案。1回の授業を「Greetings」から「Reflection」まで5～6のパートに分け、活動内容と使用教具を示している。子どもが英語に親しみ、「聞く」から「伝える」まで段階を踏んで徐々に学んでいけるように心掛けている。2012年度は、「英語ノート」から「Hi, friends!」への変更を、改訂に反映させている

図3 研究部会での話し合いの内容

◎「I want～」の表現を扱う単元の例

1時間目の内容

ショッピングゲームで、いきなり「I want～」を使ってほしい物を伝え合う活動をしたところ、子どもに戸惑う様子が見られた。授業の感想にも、「新しく習った言い方がよく分からなかった」といった声が目立った。もっと「I want～」の表現に慣れさせる必要がある

聞く活動、聞いて判断する活動、友だちのことを知る活動と、段階を踏めるよう変更

2時間目の内容

カルタを使って「I want～」の表現をたくさん聞かせる活動、カードを組み合わせ、「I want～」と言われたパフェを作る活動などを取り入れ、子どもが「I want～」をたくさん聞く機会を増やした。「友だちの好きなフルーツを使ってパフェを作り、感想を聞くことが出来て良かった」など、満足したという感想が多かった

*同校の資料を基に編集部で作成

School Data

長野県佐久市立白田小学校



◎1872(明治5)年に開校した歴史ある学校。長野県東部に位置する。子ども同士が互いの話をよく聞き、相手に自分の考えを伝えられるようになるために、外国語活動の研究に力を入れている。

校長 伊藤和子先生
児童数 237人
学級数 12学級(うち特別支援学級2)
教員数 23人
所在地 〒384-0301
長野県佐久市白田264-3
TEL 0267-82-2024
URL <http://usudasho.sakushi.ed.jp/>
E-mail usudasho@sakushi.ed.jp
公開研究会 2012年10月10日(水)



佐久市立白田小学校研究主任・5学年担任
仲沢いずみ
子どもにとって楽しい授業をつくるために、まずは教師自身が楽しみながら研究を進めていきたい



佐久市立白田小学校教務主任・6学年担任
高橋英敏
「目の前の子どもをしっかり見取り、子どもの課題に応じて、先生方と力を合わせて授業を改善していきたい」



佐久市立白田小学校教頭
井出眞一
「子どものつまずきや教師の困り感から、課題を設定して追究していきたい。それが研究の日常化につながる」



佐久市立白田小学校校長
伊藤和子
「どの先生方も当事者意識を持ち、外国語活動の研究に取り組めるような体制づくりを心掛けています」

授業研究に学校全体で主体的に取り組むために「心掛けています」と

テーマ「行ってみたい国」第2時 担任のみ

ねらい: ① I want to go to の表現を知り、聞くことに慣れる
② 友だちに行ってみたい国を紹介しようという意欲を持つ

活動	内容	使う物
Greetings	●お互いにあいさつ (How are you? I'm ○○)	
Warm up	●色、形をヒントにした、国旗のクイズ ※徐々に、その国の有名なものをヒントと出し、前時の復習とする	国旗のカードなど
Today's goal	●行ってみたい国を紹介することで、お互いをもっと知ることができることを確認 ●どんな表現を使えば、行ってみたい国を紹介できそうか、学習することを確認 行ってみたい国を紹介する時に使えそうな表現をたくさん聞こう	
Activity1	●担任の海外体験を通して I want to go to の表現を紹介 ●国旗をキーワードにしたキーワードゲーム ※時間があれば Yes, No ゲームを行う	国旗カード、写真
Activity2	●言われた国の有名なものをとるカルタ	有名なもののカルタ
Culture Talk	●行きたい国を聞いて、どの先生の希望かを当てるクイズ ※自分はその国に行ってみたいかを質問する	国旗カードなど
Reflection	●行ってみたい国を紹介する時の表現をたくさん聞いたかを振り返る	ふりかえりカード

*同校の資料を基に編集部で作成

図2 「外国語活動ふりかえりカード」

外国語活動ふりかえりカード

(4月19日)

年 組 名前

1. 今日の授業をふりかえって、当てはまるところに、色をぬりましょう。

	ベリーグッド	グッド	まあまあ
①授業中の活動に遠んで参加し、楽しめましたか。	☺	☺	☺
②先生や友達と話したことを、しっかり聞けましたか。	☺	☹	☺
③英語の音やリズムを、まねできましたか。	☺	☺	☺
④英語の意味が、だいたいつかめましたか。	☺	☺	☺
⑤日本と外国の、言葉や文化の違いに気付きましたか。	☺	☺	☺

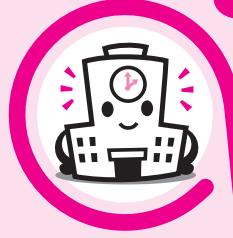
2. 今日の授業の中で、自分がかんばったことや、困ったことについて、書きましょう。

ニュージーランドの文化のちがいに気が付きました。ニュージーランドには動物がたくさんいて豊かだと思いました。

3. 今日の授業の中で、友達がかんばったことや、良かったことについて、書きましょう。
ほかの友達が、色、英語にちょうせんしてすごいですと思いました。私もかんばりたいです。

友だちの姿から学ぼうとする気持ちを伸ばそうと、自分のことだけでなく、友だちの様子を見て気付いたことも書いてもらう *同校の資料をそのまま掲載

つながる



学校と家庭の学び

「ファミリー読書」活動で

家庭で本を読む機会を広げる

岩手県滝沢村立滝沢東小学校

滝沢村立滝沢東小学校では、自ら進んで本を読む子どもを育てようと、さまざまな活動を行っている。国語の授業で各単元に関連する本を推奨したり、家庭と連携した読書活動を続けたりした結果、子どもの読書量が増え、文章表現力も向上しているという。

子どもが多くの本を読むよう 授業づくりを工夫

滝沢村立滝沢東小学校には、大人しく素直な子どもが多く、校内の雰囲気は落ち着いている。ただ、自分の気持ちを相手に分かりやすく伝えられないなど、言葉によるコミュニケーションには課題があった。そこで、2005年度から子どもが本に親しめるようになるための活動に力を入れていく。加藤孔子校長は、このねらいを次のように話す。

「本を読むと人生や社会に対する

多様な考え方に触れられますし、言葉遣いも学べます。子どもの感性が豊かになるだけでなく、感じたことを表現する力も伸ばせると考えました」

子どもがより多くの本を手にとれるよう、まず授業に工夫を凝らした。国語の授業では、教師が各単元に関連する本60〜100冊を公立図書館から借り、子どもに読むように薦める。公立図書館から何を借りるかは、11年度まで研究主任として読書活動を主導し、12年度は学校図書館支援員を務める矢羽々宜子先生と各担任

が話し合って決める。また、単元末には、子どもが自分の読んだ本について感想や紹介文を書いたり、友だちと話し合ったりするなど、自分の意見を表現する時間を設けている。

社会や理科の授業では、図書室での調べ学習を増やすなど、国語以外の教科でも子どもが本に触れる機会を積極的につくっている。

更に11月の読書週間には、普段は計算や漢字の書き取りに充てている、5時間目の前の10分間を「昼読書」の時間としている。子どもに範を示すために、担任も一緒に本を読む。

家庭との連携によって 子どもの読書への興味を深める

保護者と連携して、読書に対する子どもの興味を引き出そうとしていることも、同校の特徴だ。家庭とつながることのねらいを、菊池隆文副校長は次のように話す。

「子どもが読書習慣を身に付けるためには、家庭での働き掛けも必要です。保護者と本の話をしたり、保護者が本を読む姿を見たりすれば、子どもは読書に関心を持つでしょう。保護者の読書体験に触れることで、

読む本のジャンルが広がったり、難しそうな内容の本に挑戦したりするきっかけにもなると考えました」
家庭と連携した読書活動には、2つの柱がある。

1つめは、「親子読書の説明会」だ。毎年6月、教師が1年生の保護者に家庭で本を読むことの大切さを説明する。説明後、保護者は自分の子どもと一緒に図書室に行き、実際に本を読み聞かせる。矢羽々先生は、説明会では保護者にどのように子どもの読書にかかわってほしいかを具体的に示していると話す。

「ただ『本を読んであげてください』とお願ひするだけでは、『どうしたらよいか分からない』という保護者がいるはず。そこで、読み聞かせの仕方や読書を促す声掛けの工夫などを細かく伝えていきます」

2つめの柱は、「ファミリー読書」だ。これは、本について家庭で話し合ってもらおうという取り組みで、夏休みと冬休みに全学年で行う。学校が配布した「ファミリー読書カード」に、子どもは目標の冊数と1日の読書時間、読んだ本の題名と感想などを、保護者は子どもの読書の様子とそれについての感想を書く。

保護者が効果的に子どもに読書を促せるよう、休み中の声掛けのポイントやタイミングなどをまとめたプリントも配布している。
矢羽々先生は、この取り組みのねらいを次のように話す。

「読書課題がある長期休暇中は、普段よりも家庭で本の話をしやすくと考えました。もちろん、課題図書以外の本を読んでも構いません。子どもには、興味がある本を読み、感想を書くよう伝えていきます」

11年度は、読書週間がある11月にも1か月間の「ファミリー読書」を行った。

「長期休暇中以外にも、家庭で読書をする時間をつくってほしいと思いました。課題図書を設けないため、

子どもは自分が読みたい本を自由に見付けようとするだろうとも考えました」(菊池副校長)

ここでは、子どもの読書意欲を高められるよう、保護者とのかわり増やす工夫をした。家庭ではまず、読書の目標、本を読む曜日と時間などを話し合ってから決め、「ファミリー読書計画表」(P.30図1)に記入。

そして終了時には、子どもと保護者それぞれが、自分の読んだ本の題名と互いへのメッセージを、保護者は取り組みの感想を「ファミリー読書のまとめ」(P.30図2)に書いた。

実施に当たっては、保護者が負担に感じないようにすることを心掛けた。保護者による読み聞かせだけでなく、子どもが保護者に読み聞かせ

をしたり、保護者と子どもが同じ場所ですべての本を読んだりするなど、どのようなスタイルであれ、家庭と一緒に本を読んでほしいと、学校だよりや学級だよりなどで呼び掛けた。

進んで本を読む子どもの姿が保護者の意識を変える

一連の取り組みを始めて5年ほどで、子どもの様子に変化が表れ、休み時間や放課後に図書室で本を読んだり、借りたりする子どもが増えた。「授業で習った昆虫の変態について、もっと知りたい」などと、目的を持って本を読む子どもも多くなったという。2学年担任で研究主任の菊池尚子先生は、子どもはよく本を読むようになったと話す。

岩手県滝沢村立滝沢東小学校

◎1996(平成8)年開校。岩手県の中央部に位置する。開校以来、子どもの表現力を育む活動が続ける。子どもがより多く本を読むようになるために、図書室で本を借りるように促す校内放送をしたり、子どもの実態に応じて図書室の十進分類法をアレンジしたりするなど、さまざまな取り組みを行っている。

校長 加藤孔子先生
児童数 317人
学級数 11学級
所在地 〒020-0173

岩手県岩手郡滝沢村滝沢字狼久保795-1
TEL 019-688-6602
URL <http://www.mac.ne.jp/~te1347/>



滝沢村立滝沢東小学校校長

加藤孔子

かとう・こうこ

「どの子どもも心を豊かにできるように、読書活動を続けていきたい」



滝沢村立滝沢東小学校副校長

菊池隆文

きくち・たかふみ

「自分の行動によって子どもに範を示せるような教師でありたい」



滝沢村立滝沢東小学校

菊池尚子

きくち・ひさこ

2学年担任、研究主任。「元氣と夢と自信を持った子どもを育てたい」



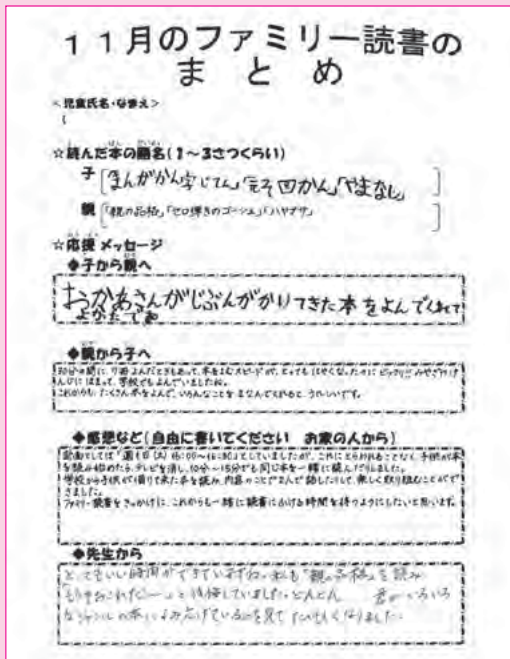
滝沢村立滝沢東小学校

矢羽々宜子

やはば・よしこ

学校図書館支援員。「子ども一人ひとりをしっかり見取り、それぞれの長所を伸ばしたい」

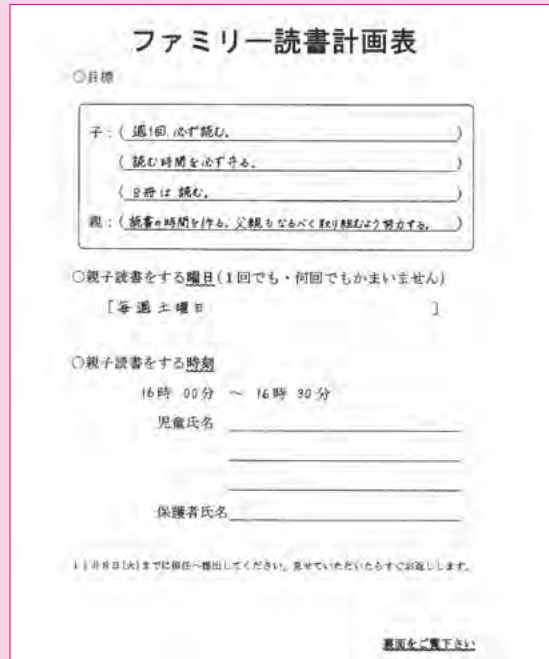
図2



「ファミリー読書」を肯定的に捉え、今後も読書活動を継続できるよう、子どもと保護者が互いに向けたコメントを書く「応援メッセージ」を設けた。子どもは、親のかかわりを感じ感謝する内容、保護者は、子どもの頑張りを褒める内容が目立つ

*同校の資料をそのまま掲載

図1



子どもと保護者それぞれが、「1日30分、本を読む」「週1日は親子で読書をする」など、読書の時間や回数などに関する目標を書き、ファミリー読書の日時を話し合って決める。裏面には、「兄弟姉妹がいる場合、ファミリー読書の曜日と時刻はそろえたほうがよい」など、工夫のポイントを載せている

裏面をご覧ください

◎「ファミリー読書カード」(夏休み・冬休み用)、「ファミリー読書のまとめ」、「ファミリー読書計画表」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロード出来ます <http://benesse.jp/berd/> →情報誌ライブラリ(小学校向け)

「国語の授業の関連図書は、1冊元で1人5〜10冊ほど読んでいます。本に使われた言葉遣いを覚えて作文に使うなど、文章表現に関心を持ち、相手に分かりやすく伝える工夫をする子どもも増えていると感じます」

読書活動に対する保護者の理解も深まっている。以前は「ファミリー読書カード」にコメントを書かない保護者が見られたが、今ではどの保護者もたくさんコメントを書くようになった。

「どの保護者も、読書活動に積極的に取り組んでくれていると感じます。自分がかかわることによって子どもが読書をするようになったと、実感したからこその変化だと思います。『子どもと本の話をするのが楽しい』という保護者の声もよく聞かれるようになりました」(菊地先生)

加藤校長は、今後について次のように話す。

「現在、活動の中心となっている先生方が異動しても活動を続けるためには、チームとして活動に取り組む必要があります。また、校長としてミドルリーダーの先生を育て、組織として動ける学校をつくっていきたいと考えています」

学ぶ意欲を育み、学習法をサポートする 6年生向けの副教材を無料でご提供します

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2011年度は、のべ約15,000校から約110万冊ものお申し込みをいただきました。

2012年度は、6年生の児童向けに、キャリア教育の授業で自分の将来について考え、中学以降につながる「学ぶ意欲」と「自分でできる自信」を育むサポートをします。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。ただ今、事前予約を受付中です。詳しくはホームページまたは本誌同送のチラシをご覧ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

未来に進むちからを育むプロジェクト。
ベネッセの学び応援

事前予約締め切り

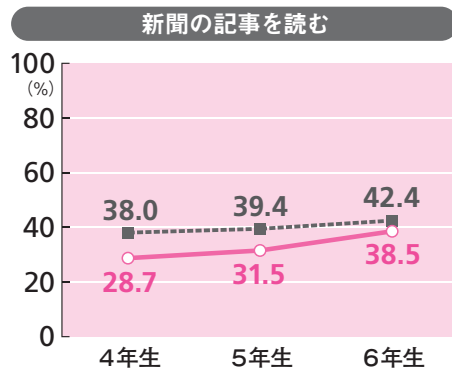
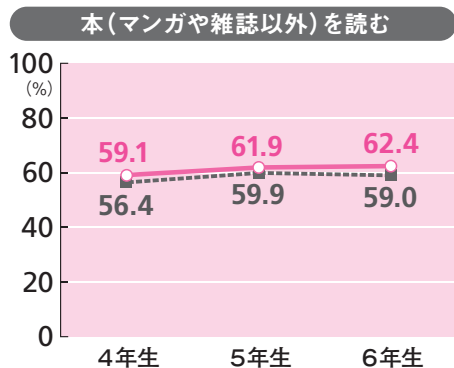
2012年
8/31(金)



小学生の本を読む頻度は上がっている

本や新聞を読む頻度(回答:小学4年生、小学5年生、小学6年生)

--- 2004年
○ 2009年



2009年を2004年と比較すると、「新聞の記事を読む」頻度はどの学年段階も4~9ポイント程度、下がっている。しかし、「本(マンガや雑誌以外)を読む」頻度は、2~3ポイント程度であるが、どの学年段階も上がっている

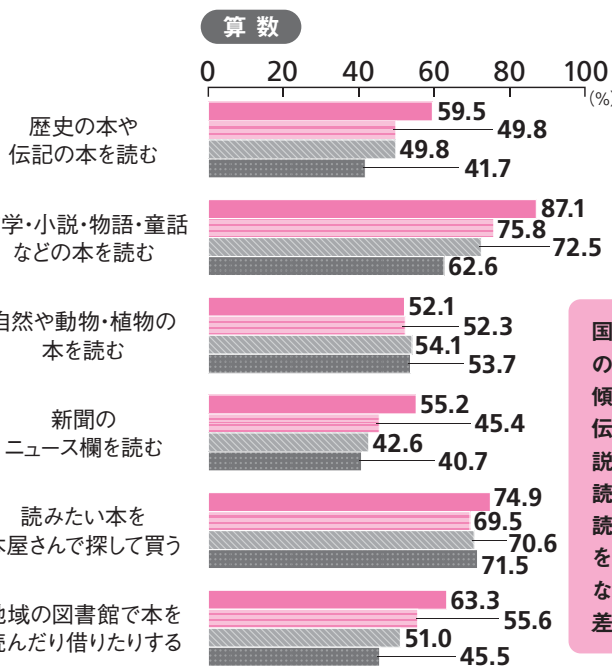
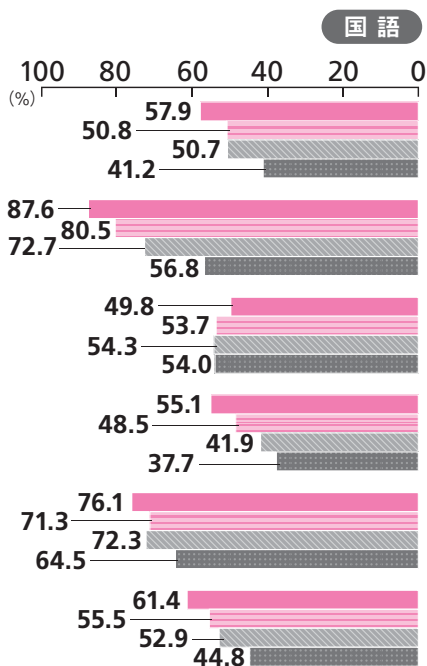
注1) 数値は「よくある」と「ときどきある」の合計

出典: Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2010)

調査時期は、2004年調査は2004年11月~12月、2009年調査は2009年8月~10月、調査対象は2004年調査は4年生1,494人、5年生1,399人、6年生1,347人、2009年調査は4年生1,153人、5年生1,201人、6年生1,207人、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査

学力上位の子どもは本をよく読んでいる

日常生活の中での「学習」(学力階層別)(回答:小学5年生)



国語と算数の学力が上位の子どもは、本をよく読む傾向にある。「歴史の本や伝記の本を読む」「文学・小説・物語・童話などの本を読む」「新聞のニュース欄を読む」「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」などに、学力上位と下位の差が見られる

注1) 全9項目から読書活動に関係する6項目を抜粋

注2) 数値は「よくする」と「時々する」の合計

注3) サンプル数は国語2,432人(上位490人、中の上位728人、中の下位777人、下位437人)、算数2,422人(上位518人、中の上位744人、中の下位745人、下位415人)

出典: Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査・学力実態調査」(2008)

調査時期は、2006年11月、調査対象は全国3地域(大都市(東京23区内)、地方都市(四国の県庁所在地)、郡部(東北地方))の「学習に関する意識・実態調査」(2006年6~7月実施)の対象者であった小学5年生2,446人に、国語、算数(各45分)の学力調査(各教科3大問構成)を実施



上記の関連データはコチラ!

<http://benesse.jp/berd/>

*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2012 Vol.1 特集「新課程2年目の学校づくり」へのご意見

このコーナーでは、編集部にご寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎総論の中に「新課程の趣旨を忘れず」とあり、まさにその通りだと感じました。現場ではとかく進度が遅れているとか、理解・定着がなかなか進まない、指導内容が多いなど、目先のものととられがちになりますが、こうした教育課程の背景にある趣旨に立ち戻ってもう一度目先にある課題を見つめ直した時、解決への糸口が見えてくると思います。
[長野県／I小学校／G・J]

◎^{じんせきこうげん} 神石高原町立油木小学校の事例は、本校のテーマ研究（言語活動）と重なる部分があり、とても参考になりました。特に、「言語活動で育成する力のイメージ図（P.12）」は、捉えやすく分かりやすかったです。このように、具体的な資料があると大変助かります。
[熊本県／K小学校／K・Y]

◎各校の取り組みは、地域の特性、児童の実態を踏まえての学校づくりのヒントになるものであり、「では、本校は？」と考えさせられました。中でも、豊島区立さくら小学校の実践においては、本校でも、生活のはしはしで感じられる、偏った「個人主義」の考え方に一石を投じるものとして、とても関心が強まりました。
[神奈川県／Y小学校／T・M]

◎事例校の中でも、^{さかえ} 寒河江市立高松小学校におけるICT機器活用のタブレットによる教育について、とても興味深く読みました。全児童1人に1台のタブレットPCを持たせることはとても大切な事だと思いますが、それを教師が使いこなせるようにすることが課題だと思います。何か、もっと古い形の授業も大切な気がしますが、いかがでしょうか。
[大阪府／S小学校／M・K]

◎特集の展望にあった「将来から逆算して考える（バックキャスト）の思考」が心に残りました。とかく目の前の子どもの実態に応じた指導・支援にとられがちであった自分は、「予測不可能な未来社会を目の前の児童がより良く生きるために、我々教師が今の環境で出来ること」を探っています。ヒントとなることが多くあり、ありがたく思いました。
[愛媛県／K小学校／N・A]

◎「学校をつくり、動かすチームワーク」が各校の実践報告のまとめに書かれてあり、「校長の役割」と「ミドルリーダーの役割」が明らかにされていることが大変参考になりました。この内容を参考にして、本校の教師集団をより活性化していきたいと思えます。
[徳島県／N小学校／F・T]

ご両親を亡くされた
お子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、(ベネッセの通信教育サービス)が全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

- ◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください
<http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/>
- ◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ小学講座 0120-977-377（通話料無料）
*一部のIP電話からは042-679-8563へおかけください（通話料がかかります）
*受付時間10:00～20:00（日曜・祝日・年末年始を除く）

未来を生きる 子どもたちのためにできること

教育情報誌『VIEW21』が発刊当初から
変わらず貫き続けている思いです。

日本の学校教育は先生方の「熱意」が支えている。

だからこそ、我々も全力で

先生方に役立つ情報を発信することにこだわりたい。

『VIEW21』は、これからも

全国の先生方と共に子どもたちの未来を見つめ、
今と未来を結ぶ教育を提案していきます。

Benesse® 教育研究開発センター 『VIEW21』編集部

編集後記

今回の取材を通じて、テストの得点だけでは測れない「その子どもの良さ」をどのように認めて伸ばすかについて、先生方が多くの工夫を凝らしておられることを学ばせていただきました。そして、そのような学習評価を行うために、保護者の方や先生ご自身が形成されてきた評価観を少しずつ変えていく必要があるのかも感じました。多忙な現場において継続的な取り組みが難しいといわれる学習評価ですが、本特集に取り組みのヒントがあれば幸いです。(杉田)

VIEW21 小学版 2012 Vol.2

2012年8月9日発行／通巻第33号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行人 (株)ベネッセコーポレーション

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

Benesse教育研究開発センター
凸版印刷(株)

〒206-8686

印刷製本 (有)ペンダコ

東京都多摩市落合1-34

編集協力 (有)ペンダコ

電話 042-311-3391

執筆協力 二宮良太

撮影協力 荒川潤、川上一生、谷口哲

イラスト協力 浅沼リカ、幸剛

©Benesse Corporation 2012